歌集

野の花

歌集

野の花

前田林外著

集歌

花の野

前田林外著

東京

交蘭社版

序

本歌集の標題を野の花と申しますると、おうあの「何を着るかに心を勞する勿れ。野の花を見よ。ソロモンも名を成したるの日、彼等の如く、、、、、美しく裝はざりき」これは露譯のを憶い浮べてかきましたのです。英譯や漢譯からの和譯には「また何故に衣のことを思ひわづらうや。野の百合花は如何にしてそだつかを思へ、、、、、ソロモンの榮華のきはみの時だにも、其裝この花の一とつに及ばざりき」とあつたかと思ひまするが、いづれも正確には覺えて居りませぬ。

と云ふ言葉から採つたんだなァと、思ひ給ふ人もないとは斷言はできませぬ。

が、標題は決して此の言葉のなかから採りましたのでは

ありませぬ。この言葉に對しましては、トルストイでしたか、ドストイエフスキーでしたかが「この言葉には人生の詩が漲つてゐる、自然の眞實が溢れてゐる。」と非常に感激して、無限の敬意を表されて居たではありませんか。

わたしの此の歌集には、そんな立派な内容は露ほどもありませぬ。しかも藝術的な形式さへ欠けて居るやうに思はれます。ですから、若しもそんな立派な内容をもつてゐる言葉から、わたしが標題を採つたとしますれば、わたしの己惚れが餘りに過ぎたりではないでせうか。

そんなら、どうしたことなのさ？

外ではありませぬ。本歌集のなかには、無意識の愛から

歌ふたる百合の花だとか、サフランだとか、すみれだとか、櫻草だとか、さては蒲公英だとかの野の花の歌が、比較的多く入つて居ります。ゆゑに野の花と申しましたのです。これがわたくしの若々しい、麗しい、無邪氣な慰みの一つであつて、そこに不純な點はいささかもありませぬ。

おうさうかえ、わかつた！

ここで又こんな優しい言葉が、わたしの心の耳のあたりを流れて行きました。

わたしは可なり永い間、この若々しい、麗しい、無邪氣な慰みを慰んで參りました。世界的苦腦をも忘れて參りました。これから先きも、一日でも生命がうせずにある間は

矢張りさうであらう、と思ひまするとわたしは歡喜に堪へませぬ。

昭和三年四月下旬、庭に白いあしびの花が豊かに咲き
にほふ日、小石川永井山の白鷗莊にて

林　外　生

後叙

この歌集「野の花」を天幕生活の間に編纂したることについて

私は日記をかいてしまつてから、更に必らず四五首の歌を詠んで、その後に書いて置く癖がありまするのです。この癖は明治三十一年から、ずつと今日迄つづいて居ります。

大正十二年の春から夏へかけて、日記から歌だけを書き拔いて見ましたら、三千首以上ありました。で、このうちから更に一千首以上の歌を拔きまして、九月一日例の通りに書室にはいつて、編纂にとりかかつて居りまするとあの大地震でした。

私の住宅は、幸に一枚の瓦さへ落ちませんでしたが、書室の前に書肆三省堂の學用品の倉庫があり、これが崩れて、その煉瓦が道路を飛び越え、宅の出口を塞いたからたまりませぬ。家族は上野公園方面へ行つて不在だつたし、非常に危險を感じましたから、私は只この歌稿だけを携へまして、やつと戸外へ出ました。と家族はいのちからがらで返つて參りました。思はず無事に對する感謝の涙が輝きました。

それから九段坂の上に登りまして、此處から「こんなに災火を擴げなければならなかつたのは、東京市民の恐るべき怠慢からであらう？」抔と思ひながら、下町の燒けるのを靜かに眺めて居りました。一夜は此處で露宿、夜明け間近に此處を立つて赤坂へ歩いて參り、青山學院の廣い裏庭へ入りました。

私らはここで友人伊藤長作君らに逢ひました。仝君らが天幕張りのことや、食物その他のことをも心配してくれました。大地はまだ屢震動して止みませ

ぬ。が、わたしらの心情はお座ですつかり落ちつきました。

私は青草の繁つた庭の天幕の中に安坐して、この歌稿の訂正や、編纂にとりかかりました。と、なつかしいこほろぎが私の膝のそばに來て類りに鳴くぢやありませんか、こんな詩的な境遇は、丸燒けになつたらばこそ領し得られたのだ抔と言ふのでした。自然はいいです。なりたりに驟雨もありました。

この一週間ほどの、爽々した清い空氣が漂ふ天幕のなかで、本歌集「野の花」の編纂は大體了りました。地震も靜まりました。で、ある曇つた涼い日に、私らは歩いて、小石川の永井山と云ふ（小石川植物園と千川の流れ抔を隔て向ひ合つて居る）舊知の高臺へ往つて見ました。この邊は祝福せられた地と見え、何の異狀もありませんでした。死んで行くべき寂しい奥津城のなかか、ここより外には精神的避難にも、肉體的避難にも、差當りふさはしい所はあるまいと思ひ、此處へ移つて來ることに定めました。

その翌日、只この歌稿一册を懷ろにして、飄然と青山の天幕を出ました。運ぶに難き重荷はなし、何といふ氣樂な引越しでせう。

それから私はここの白鷗莊にて、四五年の歲月を一睡の夢のやうに過ごしました。で、この夢の中で出來ました夢のやうなる歌、卽ち大地震の年から、大正十五年改元の月迄の歌をもこれに添へることとし、本歌集「野の花」上下二卷に、約一千二百首の歌を收めました。

大震火災で燒け失せた悲しむべき處女歌集「若き心に若き印象」等の稿本について

あの災火の突發にあひまして、わたしの家や藏書と共に（當時編纂の歌集「野の花」の原稿を除いて）私の詩稿及び歌稿は皆燒け失せてしまひました。

就中その重なるものは「花妻以後」と題する詩稿二册、「續花妻以後」と題する詩稿一册、それから飜譯「近代露西亞詩集」の稿本一册、飜譯「佛蘭西小唄集」稿本一册、飜譯「印度民謠集」稿本一册、飜譯「蒙古民謠集」稿本一册等、等、等でありました。

が、「花妻以後」等の詩は「早稻田文學」「太陽」及び「日本及日本人」の雜誌所載のものが大分ありましたし、飜譯「近代露西亞詩集」等の譯詩は、前田夕暮氏の「詩歌」、永井荷風氏の「文明」、東京音樂學校校友會の「音樂」、博文館の「文章世界」其他「音樂界」「女子文壇」等、等、等の雜誌所載のものがこれ又大分にありましたから、所載雜誌をさへ見出さば、どうかかうか足らずなりにも纏めることが出來るかも知れませぬ。

が、最も名殘り惜しく思はれますのは、當時下町の印刷屋で組版中に罹災したる處女歌集「若き心に若き印象」の稿本の全滅でした。

これに收めてある歌は大抵學校在學中の作歌で、大震災の一年前の秋頃、約三千首の中から一千首を抜き、類從的に編纂して、これに政教社の「女性日本人」所載の「新東京情景の歌」一百首を附錄としたるものでしたが、この歌集には未だ公にしない歌が三分の二以上もありました。これらはもはや現在にも、未來にも、その再生は絶望です。で、せめて左にその生立ちの大略をしるしまして、他日の憶ひ出に供して置きたいと思ひます。

ふるいことですが、私は京都同志社系の大阪泰西學館（岩野泡鳴君らも在學、その頃ギリキーといふ老教師の詩的容貌から受けました印象は、今もどうかすると私の頭に甦ります）から轉學して來て、明治二十年秋から仝二十三年夏まで、早稲田大學の前身東京專門學校の英語普通科（英語は無論、自然科學抔の科目もありて、今日の高等豫科）に學びました。（國木田獨歩君ら同級、外國の教師が前後三人ほどあり、その人々の印象は、何故か餘り頭に

殘つて居りませぬ）この時代の校舍は青い森の中にあり、內容外觀凡てが詩的獨創に光つて居りました。私の詩情はそそられました。私は歌ひ始め、歌ひつづけまして、ノートにこの三ヶ年間に何百首かの歌を記入しました。

同級の水谷弓彦、金子馬次（文學博士）紀淑雄、桂湖村らの諸君と「延葛會」を組んで、雜誌「延葛集」を編纂いたしましたのは、懐しいこの時代のことでした。この會のことは、金子博士の講演「文學雜話」に（その速記錄は「早稲田文學」に掲載）詳かに述べてあります。

仝二十三年の秋、豫期の通りに文學科が創設せられました。主たる學科はヨーロッパ文學であつたが、東邦文藝の科目もそれには劣らない程ありました。就中日本文學では記紀萬葉及び源氏物語、それから日本文學史並に作歌等の科目もあり、古歌の研究は島山健氏が萬葉集を、落合直文氏が古今集を受持つて居られました。私は相變らず、鳴け鳴け蛙、歌へよ小鳥、我れも歌

はん抔と嘯いて、水田のあぜや、森の中を散歩しながら作歌と作詩に耽りました。この頃の作歌も可なりノートにとめて居りました。受持教師が歌についてせられた歌論歌話と云ふやうなものは皆忘れてしまひました。が、只私の麻ごろもの歌抔を黒板に書いて、麻ごろも着ればなつかしといふ萬葉の歌抔を例に引いて、教場で批評せられた時の、丁寧な語振りだけは、一種の象徴として今に頭に殘つて居ります。

文科を退いてから、九段坂上の佛蘭西語專修學校の第二年級に入りまして、そこを退くまで矢張り作歌することは忘れませんでした。ノートに何百首かの歌を記入してゐました。教師フランス人はなめらかな柔かい聲で、なりふしにフランスの詩を讀まれました。その時に受けました快美感はなほ私の耳から去りませぬ。與謝野寛氏の「明星」に所載の歌は、大抵この頃のノートの歌から拔いた歌であつたと思ひます。

後ち東京外國語學校に入學して、三ヶ年間露語を學びました。この間に於ても、作詩と作歌は止めませんでした。教師に前後ロシア人が二人あり、前ロシア人はなりなりに自國の民謡を歌つてくれました。政教社の「日本及日本人」に所載の歌は、大抵この頃に作つたものでした。

右、わたしが前後十ヶ年間の學生時代に詠んで、ノートに書きとめました歌は、幸か不幸か、大抵は灰になつてしまひました。世に死んだ子の年を數へると云ふ嘲笑的諺がありますが、なるほど智識的には笑ふべきことでせう。が、親は死んだ子がむしやうに可愛くなるものださうですから、感情的には諒とすべきではありますまいか。

歌集

野の花

卷の上目次

第一編　曙と歌神（外一百九十四首）

明治三十一年……二一
明治三十二年……二八
明治三十三年……四五
明治三十四年……五二
明治三十五年……五九

第二編　百合の花（外一百二十七首）

明治三十六年……七一
明治三十七年……七五

明治三十八年……八一
明治三十九年……八七
明治四十年……九四

第三編　サフラン（外一百七十一首）

明治四十一年……一〇七
明治四十二年……一一七
明治四十三年……一二七
明治四十四年……一三六
明治四十五年……一四六

第四編　放浪の子（外一百七十九首）

大正元年……一五五
大正二年……一六〇
大正三年……一七〇
大正四年……一八一
大正五年……一九二

第五編　菫と蒲公英（外二百五十首）

大正六年……二〇七
大正七年……二一八

大正八年……二二九
大正九年……二四〇
大正十年……二五三

第六編　インテリゲンチヤ（外二百十七首）

大正十一年……二六九
大正十二年……二八〇
大正十三年……二九〇
大正十四年……三〇二
大正十五年……三一三

第一編　曙と歌神

歌集

野の花

巻の上

前田林外著

第一編　曙と歌神

明治三十一年

曙の歌

あけぼのの白き翼にうちのりて不滅の歌の神もうでこそ

、

かつて知らぬここだくの人が花の春は皆友どちの

やうにもあるかな

畫に題せる

けしの花にねざめの蝶がけだるげに極彩色の羽根
ひろげつつ

椿の花の歌

雨に濡れし白玉椿地に落ちていよよ冷たし我が魂(たま)
のやうに

、

美しき春の五月は明けるとから暮るるころまで野
べ歩りきつつ

、

戀に落ちてふくら雀のふたりづれが紫竹小竹の藪
に消えしも

東郊に遊びて　三首

池に石を投げて遊ぶも面白し笑ふ顔出で泣く顔も
出づ

庭鳥が四五羽破れ垣の外(と)に出でて一つのパンのか
けら啄くも

狹きかな我が船やれば小名木川は土手より水の溢
れむばかり

三里塚にて

水晶の玉なす水をたぐりあげて釣瓶よくれし處女(をとめ)

愛しも

鎌倉にて　五首

夢はかなく蝶もやつれて失せしとや牡丹の花の崩づれてまなく　千壽を弔うて

しろがねの猫は何せむ月花を友としてゆく歌の旅路に　吾妻鏡の四行法師が銀猫のことを憶ひ出でて

一と巻きの歌を殘してみなもとの最後の人となりし君はも　實朝の墓を過ぎて

餌やれば鳩われがちに急き合ひぬほとほと似たり人の生の姿

悲しげに谷々のうへを啼きわたる月夜鴉は何ごころぞも

鎌倉在の宿にて

宿の前につづく稲田の草とりのここだくの白き菅の小笠よ

鶴沼にて　三首

さくさくと晴らき岸べの砂を踏みて來る音すなり友にかもあらむ

友とむかし星に從ひて小松原の露を浴びつつ夜の旅もしつ

砂のうへを這へる蜥蜴も紅蟹も我れに親しきものとなりしか

コスモスの歌

コスモスの花を手にして通りたる跡はも淋しコスモスのやうに

風の歌

風の名を無宿者とこそ呼びまをせ夜をもまごつき歩りきてをれば

、

北の海の船の生活を思はせる松前ぶしの唄の悲しさ

、

夜が落つれば冷々とすなりさもあらむ秋の九月も

二十日すぎしぞ

友に贈れる

手にまける珠數玉のかざりもぎとりて火の中に投げし君がこころよ

、

ああでもありああでもなうしてかうでもありまこと人の生の面白きかも

雨の歌

ぢりぢりと痩せ細りゆく秋の日の雨をし見れば寂しくもあるか

、

死ぬることの悲しびに逢ひて生きることの面白みをば始めて知るも

運命の歌

運命は神の手にあり運命は神の玩具なり運命を恐る

雪の歌

ばたた、ばたた、ばたと夜の雪窓うてば面白しとて酒あたためつ

明治三十二年

歸省の歌、新橋驛にて

たむぼぼの花さへ一つ落さずに故郷の野べも見てかへらなむ

憶ひ出で　六首

以下「憶ひ出で」と題せるは、この歸省の時の汽車の中で、私が少年の頃に、單身東京から鄕國播磨まで（卽ち東海道五十三次を通り、幾内を經て、東部山陽道を）徒歩したるをりの情況を追懷して詠める歌に屬す。當時は諸國凋萎して、旅人は往來の寂寥と荒廢とに泣かされむばかりの時代にて、汽車はといふと、その開通は僅に東は東京と横濱、西は京阪神の間にありしのみ。私はわざとこれらの汽車にさへ乘らず、寒き冬の十二月に、ひと向きに徒歩をつづけたりき。

寂しかりし悲しかりしよ十五の冬ひとり歩り

きぬ東海道を我れ
生麥の里の貝殼のうへにふりし氷雨の音は忘
れかねつも
神奈川の丘のうへなる異人の白堊の館見つつ
行きしか
小家がちはにかみがちの小田原に早く咲きた
る梅の花見つ
がらす屋根に星かがようて湯本なる福住の湯
ぞ美しかりき
下駄を草履にかへて足萎えつつ越えたりし箱
根八里の石ころの路

不盡山を見て　二首

雪ま白ろの不盡のいただきちらと見つ黑雲のうへ
に幻のごと
雪の不盡たふとし淨し美しとほめただへつつ我が
魂を耻づ

醉僧の言葉　二首

はなし好きの黑き法衣が笑みていふ京の祇園へ貧
僧花見と
飲むに一と日醉ふにも一と日醒むるにも我れは一
と日と笑ひけり僧

憶ひ出で　六首

不盡川の濁れる水は利き箭なりわれ渡し舟を
柩とぞ見し
親知らずの荒磯に立ちて駿河灘の雪ひるがへ
す波を見しかな
天つ少女羽衣ぬぎて遊びしといふ三保の松原
見て忘れずも
ながめ好し關の址とて清見潟旅ゆくわれの足
も止めしぞ
橋に立ちわれかへりみて死むだやうな靜岡の
街に涙流しつ
寒き日よ夕陽浴びつつ葛道の碑讀みつ宇津の

谷にして

さまざまの乘客を見て　二首

あの人はいつ泣きにけむその眼には殘りの涙輝き
てをり
人の生のその面白さと慘めさが汽車のなかにも轉
りをるも

憶ひ出で　三首

川ごしに賃を拂うて大井川肩ひたすほどの水
わたらせし
天龍川の長き板橋を風寒み足音さびしく我が
渡りしも

ぬすびとに脅かされてしののめのしらしら明
けに濱松立ちつ

大米屋といふに宿る。一旅客盜に襲はれしにより、旅客みな黎明に出發せり。

紫の狹霧の幕が僧の眼に落ち來るらし醉ひがまはりて

憶ひ出で　二首

霧のなかにつつまれしごとし街道の彩と云はれし御油赤阪は
おけはざま枯れ萱のなかに一と片の古き墓石

の立つが寂しさ

名古屋にて　三首

われ下車す春の夕ぐれに醉ひのいまだまたく醒めざる僧と別れて
桃の花擔ふ花賣りが只ひとり旭紅みちたる廣場過ぐ見ゆ
池にうつる城の姿と陽にかがよふ黃金のさちほこ暫し賞でしも

憶ひ出で　五首

櫓の音の悲しかりしよ熱田より桑名へむかし渡りし我れに

伊勢に入りて憶ひぞ出づるもの二つあり關の地藏と馬子のすがたと

鈴鹿山からくも越えつ西へ歸へる少年の我れに雪ふりし朝

膽吹山の麓ゆきゆきて思ひしか野性帶びたる異靈(くすし)き山と

矢馳より大津へ渡るわが船に雪なふりそと只祈りしも

京都にて　三首

知恩院のさくらの花は咲き初めつ我れ見て行かなあすの朝けも

黎明(しのの)に起きてかつ見ればひがし山は乳色の靄と薔薇色の光り

大比叡はこころひく嶺とこしへの花も咲かぬかみ堂の庭に

憶ひ出で　三首

土人形ひさぐ伏見の寂びれ路塵吹く風にひとり追はれつつ

日短し日に惠まれぬ山崎の山かげ歩りくものの思ひつつ

酒倉のつづく白ら壁に夕かげの漂ふころよ灘に泊りつ

神戸にて、友に遇うて

たまに遇ふ人に涙はゆるされてありと云はずやは
笑ひたまふな

須磨明石の間にて

一の谷うら悲しきか紅ゐと白き躑躅(つつじ)の今も咲きつ
つ

舞子の濱にて

母のくに播磨の國はうましぐに松の濃青(こあを)さ砂の眞
白さ

人麿がむかし歌ひし入らむ陽は明石大門(おほど)にあかあ

かと燃ゆ

印南野にて

神の世も印南國原はこのごとく菫も咲きて雲雀啼
きけむ

某女史の墓を過ぎて

咲きしかどまなく萎れし白薔薇の花によそへて君
を悲しむ

日女道ヶ丘古城の下にて

海も歌ひ山も讃(ただ)へむ雲なびく姫路の城よとはに搖
ぐな

家に歸る。青山村は夢前川の西岸にあり　三首

涙もろし涙さへ落つはたとせのむかしのことも忘れかねつつ

はろばろと春の野に咲く花もちてたづねたまへる姉の優しさ

なつかしや聲もやさしき垂乳根はわが幼名を呼びたまひけり

父の言葉

美しく花を活けるは美しく心を活けることと思へや

故郷の土

ふる郷の土の匂ひをなつかしみ鍬とりてみつ背戸の畑に

民謡の歌ひ手京太郎君の死せしを聞きて

ここに生れここに歌うてここに果てその名もここに埋づめけるかも

情話に耽りて

しめやかに春の小雨のふるままに話しは絶えず夜はくだちけり

、

牛の空しき小屋かげ見ればしよぼろしよぼろ白桃の花雨に濡れつつ

、

うら寂し君が墓には一と莖の白きすみれの咲きて
あるのみ

木瓜の歌

ほほ笑まし野べには木瓜の花咲きてこの蕗魄の袖
を照らせり

山に登りて

我が生れたる郷の美しさ山青く川は白銀のリボン
のごとし

雪彦山の歌、山は夢前川の上流にあり

雪彦の雪は夢前の夢にまじり唄をうたうて海へ往
くなり

獨孤生と網干の旗亭に酌む

杯のなかに涙はこぼれけり君とまた逢はむ時の知
れねば

室津にて　三首

室の津はなつかしきところ心なきからころころりの
櫓のひびきさへ

室君の魂にかもあらむ寂しげに鳴きて飛びけり海
のつばくら

波やさしく夕陽麗はしこの泊り風ふせぐからに室

姫路の郊外に遊び、西鶴五人女「松植ゑて云云」の句を憶ひ出でて

といふとや

清十郎塚通りすがらの旅人にたづねられずやは涙ながらに

書寫山に遊びて

孤獨(ひとり)とふことをしみじみと味ひつつこの山の奥に住みて見が欲り

高砂にて

加古の海の胸のうへには鷗、鷗、眠むれ睡蓮の花のやうにも

、

さらば君いつ歸り來む豌豆の花のまた咲くころ歸り來む

再び放浪の旅路にのぼりて

山見れば父のやうなり川見れば母のやうなり別れ悲しも

明治三十三年

鶯の歌

鶯はたれよりも先づ春に目覺め春の歌をばうたひけるかも

、

花見ごろの空模樣(そらもやう)は人を迷はせりふりさうにも見ゆ
え晴れさうにも見ゆ

燕の歌

聲黄いろくちちと燕が啼きながら我が書の窓覗きて飛ぶも

眞間の里にて　三首

葛飾のふけ田のあぜに菫摘む兒に道を問ふ眞間の手兒名が

歌のなかの手兒名思へば花のやうに咲めるすがたが目に浮びつつ

一と春を葛飾の野に過さむと家さがしたり手兒名あたりの

菫の歌

ここに菫處女がひとり寂しげに坐わりゐるごと咲くが愛しさ

柿本人麿の繪姿に

櫻ばな咲きかも散ると人の生を愛憐みたる歌のひじりぞ

大伴家持の繪姿に

君が歌は柔婉にしてまたさらにうひうひしさの處女らしきも

友に逢うて　三首

たまに逢ひて友は默しつ何から先づ話すべきかとわれも默しつ

何よりも懐し磯の松原に松露ころころ採りしむかしが

君がやうに唄を歌へば世のなかの苦勞忘れむ聽く人もはた

霞ケ浦のほとりにて　三首

けふここに春の名殘りを惜みしが又來む春の暮れはいかにせむ

ながながと横たはりけり花咲ける草原に午後の陽光浴びつつ

河越えむと石を跨げば美しき藻の花がゆれて足に觸るも

土浦在にて　三首

臼を引く村少女らが唄きこゆ「臼が重いかと云うてお出で」

澤百合の花の姿のうつくしさ花びらの肉も艶やかにして

此の田舍の夜の寂しみを味ははで往くやと友が惜みけるかな

、

いにしへよ禁めぬ業の嬢歌會せし筑波の嶺のなつかしきかも

入水せる若き女の屍を見て

悲し女(をみな)かからむ後は紅皿(べにざら)の紅とお白粉をもちて何
せむ

、

むかし戀に心傾けつ黄と赤の向日葵(ひまはり)のごとくダリ
ヤの如く

月の歌　二首

月のなかの人はわれらを笑ふらむ酒もすすらで月
見つつをれば

熱のなきわが此の歌も君が詩も月ゆ落ちたるもの
と思へや

友に

あらひざらひ惡しく云ふのも世の習ひ苦に爲たま
ふな人のうはさは

、

うつそみの世は我が夢に描きたる夢の世よりは面
白きかも

コスモスの歌

秋風にあはれ吹かるるコスモスの花は靠(もた)れよ此の
破(や)れ垣に

、

ふる鄕の書寫山に雪は見え初めて夕陽華やかに今
か射すらむ

謎のやうな君がまなざしと謎のやうな君がほほ笑
みを解くすべもがな

、

雪と共に落ちて來たれり沈默と夜の靜寂がいやが
うへにも

印度の吠陀讃歌を讀みて

なぜ早く讀まざりしかと悔むなり興味豐かなる吠
陀讃歌を

明治三十四年

太陽禮讃

蠅といふ醜の蟲さへ暖かき陽のみ光りを春にも浴
びつつ

、

何も言はず卷煙草の灰をあまたたび落しては人が
物思ひをり

畫に

柔かき乳首持ちながら垂乳根の母に添ひ寢の乳子
が愛しさ

潮來の水郷に遊べる時　二十一首

むらさきの筑波嶺を見むくれなゐの霞ヶ浦に船は

漕ぎつつ
君が住むと思へば利根の川のべに咲ける薊の花も
なつかし
あの灯は利根のかなたのあの灯はむかし榮えし潮
來の津かも
與田浦を漕ぎて過ぐれば鯰川かは幅せばみ眞菰ふ
るも
いなり山の杉にかかれる白雲はおもむろに去りぬ
北へ北へと
何といふ靜けき里ぞちらほらと蘆のしげみに草屋
根の見え

水草苅る兒がわが水夫の名を呼びぬ歌ふごとくに
聲ひき張りて
アメリカン、インヂャンの民が食ふといふ菰米の
なる木は今盛りなり
此の流れに手を垂れてみればくすしくも金髮のご
と藻がからみつつ
摘みあぐれば眞珠のやうな美しき露は藻より落つ
陽に光りつつ
ごぜがうたふ唄を彩どる加藤洲の十二の橋の影の
寂しさ
涙して柵のかずのよまれしとふ仙臺河岸の趾の知

らなく

相呼びつつかろく水をかき無花果の葉かげの流れ
およぐ家鴨(あひる)ら

聞け霧のなかに消え行く船うたを「潮來出てから
牛堀までは」

しぼりたる袖の涙はあこがれの潮來へ波と流れ來
にけむ

またも聞きつ「菖蒲咲くとはしほらしや」といふ
出嶋の唄の一ふし

蘆のなかに草屋はも見ゆその門(と)には干せる網も見
ゆ遊ぶ兒も見ゆ

水の面(も)に浮ぶ黄いろき睡蓮の花をゆすりて魚の飛
びつつ

草よりも低くかがまれり水のべに草の博士と蟲の
博士が

浮嶋の城の娘が沈みけむ三ツ又沖を見れば悲しも
小紋石に娘が魂は住むといへり花の姿を見むよし
もがな

キイツの詩を讀みて　二首

イタリーに在りとふ君がおくつきは草か蔽ふらむ
霧か籠むらむ

水の面に名は書かれしか詩は魂は人の間にとはに

生きむかも

、

黄金なす冷たき秋の風吹きて黄金の色の木の葉散らすも

友に

黄昏(たそがれ)のやうに運命(さだめ)が這ひ寄りて君をこめしか黄昏の底に

、

酒はさもあれ君よ唄をし歌ひませサンタマリヤが長崎節を

、

雨はふり霧は喪服の裾を曳き空さへ低く垂るる秋かな

、

烏羽玉の房々としたる黒髪よ切るにはあまり麗はしきかも

ある少女の墓を見て

この墓に埋(う)めけむは何ぞ愛(いと)しき少女が夢と詩とバイオルと

明治三十五年

京都雜詠

舞姫の美しさ緋牡丹の苔ほど白きリンズの孔雀鳥
ほど

旗亭に酌む

歌姫よ絲な鳴らしそ友は醉うて居眠りすらし盃の
うへに

嵐山にて

陽の落つるまで見なむ櫻の嵐山宿の男よなほ酒あ
りや

桃山にて

白髪(しらが)の爺(ぢぢ)が光る鍬もて土のなかの紫の獨活(うど)掘りて
見せしも

伏見にて

なまぬるき春の雨さへふりぬれど朽ち櫻には花は
咲かざり

宇治平等院にて

山吹の花の麗はしさ蔭に遊ぶ雪のごと白き犬の愛(かな)
しさ

大阪雑詠

水の都浪速なつかし西鶴と近松の詩を産ませしと
ころ

西鶴の墓にて

面白く君がかきたるくさぐさのその草子こそ時代(とき)

の姿なれ

網嶋にて

曾根崎に泣きたる涙殘りあらばこの大長寺の墓にもそそげ

文樂座を見て　二首

近松が心中道行きの抒情詩と思はせぶりの面白きかも

あやつりの人形芝居はな滅びそ惜しとのみかは藝は神なり

途上にて　三首

巡禮に汽車はふさはじ菜の花の河内、和泉は歌う

て歩りけや

巡禮がゆく街道の面白さ木賃泊りといふことさへも

長き長き我が生の旅も菅笠の巡禮が群れにまぢりて行かな

奈良雜詠

過きしやは花の羅馬さへギリシヤさへ奈良の都のその盛りには

寺寺の鐘よ鳴れかしねもごろに聽きてしのばむ奈良のむかしを

千年があひだも歌に耽りたし奈良にはひとり打ち

通(とは)し居て

鹿の歌　二首

パンやりて匂ふ馬酔木(あしび)の花かげに春の永日(ながひ)を鹿と遊びつ

我がそばに静かにも來て我が面(おも)を覗く鹿には我れよほほ笑む

、

咲く花を夢と思ひぬ青丹よし都の址の芝生踏みつつ

若草山にて

わがこころ若草山の草のやうにわかわかとこそ魂(たま)

も優しく

法華寺の前を過ぎて

尼よ暮るる春を悲しと思はぬかソハカソハカと鐘叩きつつ

藥師寺にて

今もなほみあとをつくる石工(いしく)らが石きざむ音漂ふごとし

燕の歌　二首

鐘つけば燕飛び出でつ藤原のふるき伽藍の釣鐘堂ゆ

燕、燕、釣鐘堂に巣をあむなとても棲むべきとこ

ろならねば

法隆寺にて

天地(あめつち)の濶(ひろ)き久しきあひだにて此のふるき塔殘りし
かひとり

佐保路にて

われは行く佐保路を隋の煬帝が燕飛ぶとふ歌を誦(す)
しつつ

途上にて　二首

巡禮が歌なつかしや父母のめぐみもふかき粉川寺
といふ
巡禮の娘とあとやさきになりつつ美酒(うまざけ)三輪の里ま

でぞ來し

初瀬路にて　三首

妹も我れもやどの娘にと初瀬までゆく道すがら菫
摘みつつ
遍路の人のかたみか路のべの松の木蔭のふりにし
塚は

、

鐘が鳴る黎明(しののめ)を呼ぶ長谷寺の鐘が鳴るなり音の明
るさ

巡禮に

ここだ奇蹟を巡りたまうて來たるらし白き旅杖(たびづえ)の

ちびたる見れば

妻に、東京に返へりてのち

上方の美しき夢を打ちつづけ打ちつづけ見よ又行くまでは

、

詩を話し劇を語りて餘りある秋の夜長の面白きかも

友に

いかに我が寒き冬をし送るかとをりにふれては思ほすや君

第二編　百合の花

第二編　百合の花

明治三十六年

、

我が魂は夜の道照らす提灯のふらふらとせり花咲く頃は

、

さくら、さくら、と待つはひととせ見るは一と目花のいのちの短くもあるか

、

遊子我が思ひ惱みてくずをれる春の暮れこそ艶(なま)め

かしけれ

、

いたづらに花を手折りて泥濘へ投げすててゆく人を見しかも

、

二千年宗教は世につづけどもいかにか爲けむ只遲々として

、

むらさきのあけぼのが澤にくだり來て菖蒲の花を染めにけむかも

利根川の堤を歩りきて

利根川は豐かに流るおのが若さ、おのが力の大きさをもて

、

君と酌む酒の匂ひはむかし飲みし浪速あたりの酒に似たるか

、

水鳥が夢覺ますらしふくらめる蓮の莟の破ぶれるごとに

、

美と愛とのいづみとぞ思ふいつくしき妹が二つの瞳見る毎に

我が魂を君よナポリの民の謠を歌うて運べイタリ
しまでも

、

生のあひだは人みな劇のなかの人罵りののしられ
戀ひこはれつつ

、

ぽつねむと眞暗き室に默しつつ坐わりて居るも面
白きかも

、

死ぎはに惱みしといふ友の顏がわれに向ひて微笑
むごとし

、

白日の夢を夜につづけては又白日につづけて見な
むい寢しい寢ては

シエレーの詩を讀みて

白妙の無垢の絹地に紅ゐの血を濺ぎたるごとき君
が詩

、

何をするともなしに雪の降りしく夜夜明けまで坐
すともし火のまへ

明治三十七年

、

ほむのりと白らむ夜あけこそ美しき若き少女とわれも讃ふれ

、

花の頃の都大路は人出多み紅き埃りが燃えあがりつつ

市川に遊びて　二首

霧の色はうす紅ゐに見えにけり桃の林に桃咲くらしも

桃の唄を聞かせたまへや桃酒を桃の畑にひさぐ桃の娘

友に

菜の花の咲き初めてより甘だるき匂ひ流れむ君が室には

、

杯の酒飲みほしてぼつねむと底覗き居る人の寂しさ

、

夜の都の灯の美しさゆらめきて長き頸飾りの玉と輝く

、

會ふといひ別れるといふも奇しきこと生れるとい

ひ死ぬるといふも
、
齡(よはひ)とふことを忘れてこのごろは年のよるとふこと
も知らなく

友に

幻の想ひ出に君は耽るらむインドは夢の國といふ
からに

ロセッチの詩を讀みて

君が詩はすがたけ高しほつそりと綠の莖(くき)に咲く百
合よりも

友に　二首

美の國のありとあらゆる美を見むと旅立つ君をう
らやむぞ我れ
な忘れそその美しきナポリの民の謠をし蒐めるこ
とを

いくさの歌、日露の

其處(そこ)を退(の)けおらが其處へ行くとふ諺を目に見せに
けりロシアの愚かさ
、
秋風は稻穗こき居る野少女が髮をむざむに吹きさ
らしつつ
、

君が胸に蓄へ置ける哲學を呼び出ださずや今はその時ぞ

冬の夜の歌

風が鳴る風の音聞く夜一と夜いねずてひとり風の音聞く

、

いざゆかむ幻のなかへ霧のなかへ憧れのなかへ星のなかへと

、

世の中はひとりぐらしに如くはなし墓にゆくまで戀にくすぶり

友に　二首

都では別れ別れに住まずして軒並べむと云ひしか君は

杯を重ね合ふこともまたあらむ都へのぼれ雪の國出でて

猫の歌

琴の音を猫は愛づらしのびやかに糸に觸りて耳傾くも

明治三十八年

夢の歌

夢の國そこに遊べる美しき夢は美しきままにこそ
置け

、

世の中の人に愛着を起させる花の魅力のかぎり知
らなく

某女史の自畫像に

面影は君が人形に遊びたる少女のころの美しさか
も

春雨の歌

糸杉の糸のやうなる葉にそそぐ糸より細き春の雨
かな

友の家にて

搖籃(ゆりかご)のなかに眠れる絲兒(みどりご)は何を夢みし一つ笑みに
けり

、

ふる郷といふ言の葉に母を慕(しの)び我が少年の春も描
きつつ

近藤逸五郎君と但馬國出石の話をして

山雀(やまがら)が脊子(せこ)戀ふ歌をむかしわれ聞きつつ越えし春
木峠は

、

ナポリの春、噫、思ひ出の美しきナポリの春と友

がたよりす

、

人の生や若さもかくは流るかと流るる春の水に嘆かふ

、

仕舞ひぎはに彈きたる琴の弱々しくふるへて消ゆる音よ面白し

上總雜詠

斑牛の群れがのぼりゆく惜しげもなく丘の草花を足蹴にしつつ

九十九里濱にて　二首

午さがりの焰のごとき陽を浴びつつ砂のうへ行けば刺さるる思ひ

いくたびも鰯雲見つつ足休む九十九里濱歩りき疲れて

問答の歌　二首

浮べてもすぐ消しましし微笑みを今宵は長く見せたまふかな

今宵君が頰の靨し見ぬからに見るまでと待ちぬわが微笑みは

、

いつもいつも住きことととても同じければ人飽くら

むかその單調に
、
藍いろの秋の夕空よさびしげに一羽の烏の飛び行
くが見ゆ

友に　二首

此の一と冬君と南國に暖かく經まく欲しけど暇の
あらなく
むしりとる頃となりたる蜜柑見て我が南國の冬を
しのばゆ

旅にて　二首

遊子我れ聞きて悲しむねがはくは「鳴くななない

そ磯邊の千鳥」
友よ此の酒をあぢはへ天國の禁斷の酒の匂ひする
らし

ヴエルレーヌの詩を讀みて

ヴエルレーヌの魂は妙なる句と句とのひびきのな
かに宿りをるかも

明治三十九年

旅にて

この村は只花が咲くを見、
ばかりが生活なるかも
やがて花が散るを見る

友に

こぞの春君と見たりし野茨の薄紅ゐの花も咲きしや

小杉乃帆流君に

雜草の原に白百合の花のみの道ほの見えつうねうねとして

、

インド更紗を我が見るごとにインド地にさまよへる友を思ほゆるかも

、

眼の前にちらつきて見ゆ庭鳥に餌やりたまふ母の姿が

、

あてもなくしくしく霖雨ふる頃は屈原が離騷を披きて見るも

螢の歌

我が招けば掌のうへにおのづから落ちて來るごと螢來にけり

平磯にて

松魚釣りの妻子なるらし靄の這ふ渚に船を待ちつつ騷ぐ

赤熱の夏の太陽が照りつける沖の岩の上に眞裸乾

すも

平潟にて、戯れに

日和山に雲かかりをり平潟に波うねりをるどうしたことなのさ

飯塚直彦君(醫學博士)と古關勿來の趾を見て

見たまへや葉櫻のかげの石ぶみをここは勿來の關の趾とあり

磐城にて　二首

海に迫れる山のうねりと岸に溢るる波のうねりを見つつ磐城へ

石炭の出どころを見つ蝸牛の殼のごと紆ねる山の底にして

、

心打たれむ巷に出でて人の生の生きたる姿よく見て居れば

旅にて

藁塚のかげに吹きならす笛につれ歌ふ牧歌の何ぞ悲しき

、

夜が來れば都の灯をや女をや酒をや思はむサガレンに友は

、

わがからだの熱はましたり窓のそとは冷たき雨の
しくしく降るに

、

稲が黄ばめば眼の前に我がふる郷の秋の祭りのさ
ま浮びつつ

、

人のいまだ往き來せざりし道を拓き往き來したら
ば面白からむ

槻の歌

大空に槻の大樹が葉音立てずそそり立つこそかう
がうしけれ

猫の歌

乾すべく湯げを立てつつ爐のそばに濡れ天鵞絨の
猫しやがみをり

、

一としづく落す涙にうごかされふたしづくからの
涙落すも

、

わが門に大き流れが二つあり時の流れと生活の流
れ

みぞれの歌

雨まじり霙ふりつづく冬の夜は酒飲まずして寒さ

堪へめや

明治四十年

、

この如く花のさかりの春にしてこころ悲しも遊子
われらは

、

ともすれば戀の憶ひ出にとらはれて花の春さへう
つうつとして

甲斐にて

明日(あす)來るまで散らであれよと歩りきながら山峽(やまかひ)の

花をふりかへり見つ

呂昇が聽きて

おしてる涙速女(なにはめ)がかたる淨瑠璃よ喉と絲との色艶
のよさ

畫に

どうしようかと少女はものを思ふらし摘みたる菫
膝の上に置きて

雜誌「白百合」廢刊の時に

いとど悲し滅びるもののなかにありて美しきもの
の滅びる時は

相馬御風君に

我れらもと放浪の子なりいざここにちりぢりにならむ花の如くに

下總にて　五首

麥靑き田圃のなかを眞つ白な一筋の川が流れてをるも

此の室へ吹き入る風はあの畑の罌粟の花をば撫でて來しかも

春山の裾の林に若葉こぎつつ歌ふ少女の聲の麗しさ

思はずも茨に裾をとられけり歩み遲しと君な咎めそ

道のべに蛇の脫殼見つけては互に呼びて立ちとどまるも

水と草にあこがれてゆく遊牧の民のごとくに我が道行かな

牛の歌

ながむれば丘の畑の蕎麥の花は眞夏の空の雲ゆ白しも

靄のなかに鳴く牛の聲よ遠々しわれと百歩も隔たらなくに

途上にて

こぼるるよ山鳥の尾のしだり尾が獵袋からいと麗はしく

日光に遊べる時　十八首

雨雲は鳴蟲山に千切れつつ蛇橋のうへに虹立てり見ゆ

みどり濃き杉の木立に湧くがごとかがようて立てり丹塗の塔が

獅子に牡丹千人唐子が智恵遊び日暮らし門の影り繪麗しも

ねむり猫のねたる姿の愛しさを人にまじりてわれ

もただへつ

生贄の舞ひの少女が下げ髪はゆらゆらとゆらぐみあかしの火と

稻荷川瀨はせせらぎて水清みわれ面影をわたりつつ見む

霧降りの瀧激ぎち落ち水岩に觸れて碎けて散りていやさらに白し

奇しき智者天海坊がおくつきに奇しき花摘みささげまく欲り

二荒うらみ山の奥は冷かにて夏の八月うぐひす啼くも

抑へがたき外様大名を君はしも抑へ束ねて麻屑の
ごとし
な羞みそなほも歌はずや紅き紐の菅笠をきて馬追
ふ少女
老いも死も知らに一とつの大きなる岩寐ころびつ
大谷川の瀬に
とどと鳴り華厳の瀧はとどとひびく山またとどと
どととととどろく
華厳の瀧ま白き霧に蔽はれて美しとのみ見えにけ
るかな
屍より草萠え幽花咲くといへり岩燕飛ぶ魂ならむ

かも
ぬばたまの黒髪山の夜を寒み白衣行者らが紅き火
のなか
ほととぎす今宵も幸の湖を啼きて飛ばずや矢のや
うに細く
月照りてお花畑とふ草原は南蠻の更紗ひろげたる
ごと

友に　二首

甘寐なす川にゴンドラ君は浮べヴェニス少女の背
をし撫でけむ
見まく欲り水の都のヴェニスなるリアルト橋を舟

ゆ仰ぎて

、

死は悲しさけて語るな盃をはたとせのあいだ重ね
し友の

、

酒槽(さかぶね)から溢れ流るる酒のごと我が憶ひ出よ流れて
匂へや

、

すつかりと食ふさへやめて居る我れに食後三十分
何の投藥ぞ

友に　二首

君が住む出羽は雪國醉鄕の徒と飲むらむか爐に炎
立てて

君が名は歌のなかにし聞きし名ぞ酒樂(さかはがひ)とや「轉樂(うただね)
し、ささ」

、

雪の夜も銀座カフェーの華やかさうべ享樂兒がな
つかしがるも

第三編　サフラン

第三編　サフラン

明治四十一年

櫻ばなの歌　三首

さくら花咲きてな散りそと友は云ひ咲かず含みて
あれと我が云ふ

櫻ばな君はいづれを賞づるかや一とへは愛し八重
は媚びたり

咲いてゐる、咲いてはゐない、咲いてゐる、咲い
てはゐない、をはつせの花

艶のなき唇が産む微笑みはあはれ廢墟の菫とも見ゆ

友を悼みて

あの春は伏見竹田に淀鳥羽と足にまかせて歩りきしものを

、

醉ひてからまこと言ひつる人のあり酒のなかには
まことあるらし

鐘の歌

撫でるごと撞けば撫でるごと無縁寺の春の夕べの
鐘がひびくも

、

美しきわが幻とわが夢はわが生のあひだ消えずも
あらなむ

郊外に遊びて

草のうへに友は寐ころびわれは坐わる暮れゆく春
の詩を歌ひつつ

北齋の版畫を見て

北齋が花の畫のうちで海棠は美しき花の一つなる
かも

ねぶの花の歌

そよ風に合歡木の淡紅いろの艶花は眠れるままに

やまず搖れつつ

ある クリスチャンの家にて

この園には泉湧き出で百合、サフラン匂ひけるかな雅歌を讀むごと

、

眞夏ごろは水の鄕こそゆかしけれ河風の光り藻の花の匂ひ

、

大地も眞夏の熱きさかりにはその呼吸苦し疲れけらしも

プーシュキンの詩を讀みて

君が魂は花のやうなりそのふるまひその言の葉は奇しくも匂ひ

、

あてもなく野路を歩りきて野田川に白菜洗ふ兒に道問ふも

、

いつの間にか花の少女も妻となり兒つれ籠をもち青物市へ

蒟の花の歌、榎本武揚氏を憶ひ出でて

あざみの花踏まれながらもなほ咲きぬ道行く人よ涙拭はずや

鎧山にて　四首

浪よせ來て我が築きたる足もとの砂の小山をもち
てかへるも

夜くだちに火のせせらぎを流しけり渚に燐の海草
撫でて

慰むと虹色貝を汐干れば砂洲に出でて拾ひけるか
な

砂のうへに横たふ船の船腹に塗りたる瀝青の匂ひ
しるきも

、

月夜よし君が稻毛にいたるまでは雲も出でまじ月

も落つまじ

、

名も知らぬ秋の小草にとりどりの小さき花の咲く
が愛しさ

こほろぎの歌

歌悲しこほろぎ、こほろぎ、こほろぎは歌うて止
まず夜は更けにつつ

、

窓あければ夜の美しさ波のやうに月の光りは流れ
込みつつ

友に

長かりし君が放浪の年月よ「琉球は石原」廣から
なくに

畫に

いたいたし止まらむとすれど止まりえず秋風が搖
る草の葉に蝶

、

死の床に横はりをる友を見てしみじみ感ず我が生
は夢と

、

荒野原名も彫りてなき墓石のもとに倒れて泣くは
誰が子ぞ

、

誰れか知るうつそみの世のまさかの時これより先
きはいかになるかを

友に

ひさに遇うて君と語りて見まく欲り珍らしきこと
も悲しきことも

、

人は他の人のうへをも思はねばならじと思へわれ
の愚かさ

、

遍多く名殘り惜みし旅の人を思ひ浮べて嘆くころ

かも

此の頃はとかく風吹きをりをりは雪もばらつき出
でがてにつつ

、

人磨をはたブーシュキンを歌と詩のまろうどとし
て迎へむとこそ

、

我が夢に見たる光りは白銀の波の穂染むる黎明ぞ
これ

託兒所にて

大粒の涙孩子の顔に落ちややこほほ笑み母泣き濡
れぬ

明治四十二年

白つつじの歌

純なる乳の白さに咲く躑躅手折りてもみつ裏にせ
ばやと

、

もの優しき夢は長崎までも走る江漢が紀行見て寝
たる夜の

郊外に遊びて　二首

菫咲く野の美しさここだくの春の化粧の少女らが

出でて
摘みてあげよその紫の草の花は生ける人にも死せる人にも

切支丹屋敷跡にて

一と目見てからと花の咲くまでを朝妻がいのちごひせる言の優しさ

薔薇の花のその刺繍のすばらしさ世に麗はしきものの一つかも

黎明の白らみかかれる空見むと五月の頃は早起きするも

梅の實の歌　二首

雨晴るれば陽は繁き葉のあひに黄ばむ梅の實に映えて煌きにつつ
紙に包み處女にやらむ我が庭に標ちて梅ありその實三つ四つ

友に　二首

君勉めよ人の流れの波をうつ首都に道を拓かむがため
君が妻も君が子供も友も嘆く酒場なむどに浸りたまふな

何も知らぬ兒を尼にして尼寺に生を過ごさせる親
は鬼ぞも

狂女を見て

けらけらと笑ふかと思へばさめざめと泣き濡れて
居る失戀の女

たより絶えぬいかにか爲けむオレンヂの花咲く國
へゆきにし友は
天地の光りと闇の爭ひは始めなかりし終りあるべ
しや

今の我がくらし申さば朝は散歩熱き眞晝は眠るば
かりぞ

雲の歌

照りかがやく夏の藍色の大空をまむまるな白き雲
が通るも

居酒屋の壁にかけたる廣重が繪を見つつ杯の酒流
しつつ

今もなほ眼のまへにあり須磨明石月を見し夜の美

しき海が

、

雲の影と月の光りを來て見なむこの川の水の絶え
ぬ限りは

神奈川在にて　二首

灰色の霧は沼より這ひあがり君すむ村を包みける
かも

あてもなく野原さまよへばいつかなりぬ午後の日
影が紫いろに

畫に

イタリーの僧にかもあらむ天鵞絨のざぶとむのう

へに坐わるよゆたに

神に憤る人の言葉

七日七夜神に祈りしかど何一つ暗示給びねばはら
たちにけり

、

君と我が手紙のうへに欠けたるは只一聯の戀の歌
かも

、

夕霧のなかに消えゆく友が家をなつかしと見つ坂
のうへにして

、

秋の暮れに好きなるものあり知りますやひとりぼ
つちの寂しみぞこれ

巣鴨養育院のうらを通りて

からたちの垣の破れのあひだから廢れたる人がさ
はに居る見ゆ

郊外に遊びて

われゆきぬ小春日和のつづきしかば柿の木村の柿
の葉を見に

柿の葉の眞つ赤なる枝にあひだ置かず翼うちつつ
鵯鳴くも

、

日照りするも乾るときはなし唇ゆ紅壺の紅酒壺の
酒

友に

長きあひだ美のイタリーに遊び居る君か多彩の畫
筆しのばゆ

、

道のべの消殘りの雪に陽は映えてそぞろ歩りきの
我が眼まぶしも

、

我れ百まで生きむと誓ひ別れたる友はその日の夕
べに死せり

日課の歌

爲なければならぬ仕事はさはにあれど日向ぼつこ
も日課の一つ

星の歌　二首

地の渣滓に汗がされもせばいかにせむ美しき星よ
空より落つな
美しき星をほむるには餘りにも人のあひだの言葉
貧しき

、

大地に頭垂れながら冬の道をとぼりとぼりと行く
は誰が子ぞ

明治四十三年

、

春が來て山が眼をさませばうつとりと川も眼をさ
まし囁ぐらしも

、

この園の靜かなるかな草の伸びる音さへ聞こゆ一
と葉一と葉に

、

いつも桃の紅らみしごと美しき夢ばかり見て居ら
ましものを

雲雀の歌

うたひつつ雲雀あがれり薔薇いろの曉迎ふ使者なれや汝は

、

卯月野をひとり只歩りく春の歌をしらべながらにひとり只歩りく

、

少女らがもてる帛の爽やかさ桃色の歌を詰めにけらしも

、

東邦の春のやみ夜は面白し夜鳴鶯はいまだ聞かねども

、

われは君を昨日の夜夢のうちに見しばら色の頰のにこよかにしも

雁の歌

ぽかつきて來たからにシベリヤへ旅立つと雁が鳴くなり雲がくりつつ

、

ほのかにも我があたりをば漂ふは妹が烏羽玉の髪の匂ひかも

、

目ざめよと若楓の枝に朝なさな見なれぬ小鳥來つ
つ鳴くかも

、

わかれには手のみ握りてもの言はず思ひふかげな
妹がまなざし

、

門づけに歌はせて君をもてなさむ酒さへ魚さへ拂
底の夜ぞ

、

眠むたげに無駄話しして熱き日を友とおふちの蔭
に暮らすも

、

火と燃ゆる柘榴のかげに隱れたる友が畫室にモデ
ル見しかな

ほほづきの歌

少女らがふふみて鳴らす酸漿は猩々緋に熟れて莢
は垂りつつ

郊外に遊びて　二首

悲し友と枯草燒きし野べに來て綠の草に置く露見
るも

ふりにし鎭守の森の繪馬堂に是眞が鬼女も見えて
面白ろ

下總にて　二首

水草の暖かき呼吸と泥土の臭ひする沼に小舟漕ぐ
我れ
魔の川の堤のうへに標立てて花子溺死す七歳とあ
り

某女史の追悼會に

眼のまへに咲く花のごと美しき君が姿を浮べて見
るも
、
ここだくの黄金懐におのが好む異國ことごと巡り
見が欲り

毛詩の國風を讀みて

支那の民が口にまかせて歌ひたる毛詩のなかの謠
の愛しさ

コスモスの歌

秋の色の秋の花ゆゑコスモスは咲むといへどもこ
こだ淋しも

友に

君とふたり雨滴の音を夜くだちに山寺に聽きしむ
かし思ほゆ
、
ともし火のかげにほの見えつ若き兒が微笑む姿う

なづく姿

、

妹とむかし銀座あたりの夜市見て鷲(を)鷺(し)のやうにも
歩りきしものを

、

夜を寒みいのねらえねば起きてわれも爐のそばに
歌ふ蟋蟀(こほろぎ)とともに

、

紅燈のがげには酌めど君も我れも酒に思ひを溺ら
すべしや

古事記の常夜往くと云ふことを

烏羽玉の夜はその黑き影をしも世の人の魂に殘し
往きしか

、

ともすれば千切れ千切れになりやすき雲のごとか
も我が思ひ出は

、

機關車が紅ゐの眼を妖(あだ)めかしつつ眞つ暗(くら)な夜枯野
走るも

横濱にて

港町の夜は華やかなともし火と酒の匂ひと絲の音
と歌

、

ちりりむと鈴が音立てて來るが見ゆ隣りの猫よ雪だらけにて

明治四十四年

菜女史の歌集に

君が歌は白き冷たき乳のなかに咲(さ)める菫のやうに愛(かな)しも

、

鶯の歌の言葉はわからねど聽きて嬉しも漂(ただよ)泊ひのわれ

利根川の堤にて

東風(こち)を孕み母なる利根の流れをば白帆ここだくのぼりけるかも

、

初咲きのばらの花見て若き日の思ひ出に醉ひつ君が園にして

、

新妻(にひつま)を國に殘して只ひとりインドの奥へ行きし君はも

かげろふの歌

カフエーの蜉蝣を見よ繪玻璃窓の薄き明りに醉う

て踊るも

友に

朗詠を誦してみたまへこれにまさる興あるべしや
霖雨ふる頃

、

いま雨は小降りなるらし樋ひゆ落つ瀧なす水の音
やみたれば

、

われ死せば曠野に埋めてそのそばに只一と片の自
然石を置け

旅にて

小流れの岸の姫百合のいぢらしさ蔦と茨にとりま
かれつつ

葛飾にて　二首

里人が月の明りに麥つきつつ浮かれてうたふ唄面
白し

碧淵に樂しげに泳ぐ魚を見ては釣するこころ起き
るべしやは

、

ともし火をかかげて岩の洞窟へ入りとはの疑ひ覗
きても見よ

、

ゆるやかに波うつ海に君と向ひ灘の美酒(うまざけ)また飲ま
むかも

星の歌

星一つ輝くと夢むふる郷の涙の友が室のうへにし
て

月の歌

港の月美しき面(おも)を見せにけり泊(は)てし諸船(もろぶね)の眠れる
後ちに

、

匂ひ高き百合のすがたかも東京の夏の女の浴衣す
がたは

、

幻は過ぎたるもよし來むもよしうつつながらの幻
もよし

、

立ちはだかり白米のなかゆ丹念に石拾ひ出す米屋
面白ろ

友に　二首

何すれど涸れしと嘆(かこ)つ歌の泉君がみづから埋づめ
て置きて

掘れば涸れし泉もやがて湧き出でむはた新しき歌
もひびかむ

コスモスの歌

コスモスの花のさびしさその花をさびしげに見る
人のさびしさ

信濃にて　三首

松茸の匂ひがすなり濕つぽき朽葉蒸せ土の匂ひま
じりに
秋の夕べ丘の宿にして谷の底ゆ湧きのぼる霧を見
れば寂しも
昼は我が耳にも止めぬ鳥さへも夜半にし聞けば聲
奇しきかも

、

夢のなかに美しく見たり人の生をとてもうつつに
見がたければぞ

、

亡き戀の繪姿を手にとり見つつ繪姿濡らす人のい
ぢらしさ

風の歌

さすらひの詩人のごと此の風は嘯きながら旅をす
るかも

雲の歌

すみれ色の秋の大空に白雲は切れて散りたり風も
あらなくに

歸り路は迷はざるべし月出でて星輝かむこころ安かれ

鎌倉に遊び、廣元の墓にて

寒き日よ賈島が蘇秦弔へる絶句憶ひ出でつ君が墓にして

、

戀に醉うてさねさし相模の江の嶋に消えしふたりは常忘らえず

蟋蟀の歌

暮れてゆく秋の草むらにこほろぎが聲をゆすりてあてなく鳴くも

、

秋風の吹けばま悲し乳のやうな池水の面に小皺たたむも

時の歌　四首

あら野原思ふまにまに歩りくごといつも自由に時のなかをこそ

いま魔が來て奪らむとすなりな奪られそおのが有ちたる貴重な時を

なるなかれ時のとりことなるなかれ百にも足らぬ我が生なりせば

鈍き我れよ無くなりし後の時惜むある時の時はおろそかにして

明治四十五年

、

美しき神の領なれや春は皆花に目ざめて花に眠るも

鶯の歌、旅にて　二首

鶯の歌聽きをればいつの間にか魂の疲れも忘れけるかも

嬉しくも聽き耽りけり鶯を聲のみちたる春山にして

て

友に

インドの奥支那チベットの境には麒麟住むとふよく見て描け

友に

われに話せ君が見て來たる暖かきレモンの國を夜はくだつとも

浮間ヶ原にて

星のごと愛しく見えつちらばらに草原に咲く櫻草の花

、

遊子われらがつねの話しにもともすれば悲愁の影が投げられけるも

、

浮び出づあるかなきかの憶ひ出に酒の匂ひと友の顔とが

清澄山にて、神話を思ひ出でて

石の上に斧殘したる杣人は木を伐る音も殘さざらめや

館山にて　十一首

ことさらに興ふかきものか廢れたる城山の趾に登りて見れば

館山の磯にめざましく叫びつつ碧光る潮が寄せ來るぞこれ

枇杷山の枇杷の實熟れて黄熟を病めるがごとし陽に合へ照りて

うす墨の繪の具一とはけ刷きしごとき山のあなたは友が里かも

ふる鄕の山の姿に似たる山をきのふもけふも見つつ描きぬ

ここだくの此の砂のなかに誰れ知らに泣く一と粒の砂もあらむか

沙濱に大波よせ來その大波打ち越え打ち越え犬の

泳ぐも
われは船犬は波打ち際を走るわが船を見つつおの
が宿まで
と吠えしが我が顔認めてうれしげに地に輪をかき
て犬の踊るも
わだつ海の浪吹く風の生温さ少女が琴の絲か綏ま
む
暗の海行く船の帆をうす紅う野嶋ヶ崎の燈は照ら
すなり

鏡の浦に舟を泛べて

雲は風より疾き足どりもて空走る影のうつる見ゆ

鏡の浦に

舘山にて、石川啄木君の死を聞きて

夜くだちに眼に見えぬ友呼ぶがごと沖の鷗の啼く
が悲しさ

（上卷　終）

第四編

放浪の子

歌集

野の花

巻の下

前田林外著

第四編　放浪の子

大正元年

榎本武揚氏を憶ひ出でて、人の君が語るを聞き

眠りたる我が若き時の憶ひ出が君が名を聞きて目をしさますも

いくさの歌、函館の　八首

艦(ふね)と艦が砲火まじへていり海は彈丸(たま)のひびきに水

煙立つ
千代田捉られ鬼の回天骨となれどひとり蟠龍いよ
よ勇まし
海の砲火山の篝火かがようて夜の函館を照らす凄
さよ
陣太鼓七重ヶ濱に鳴りわたり砂洲のラッパ聲低き
かも
よせてに申すこは國になき海律書傳へよ死なむ我
れ釜次郎　榎本氏より黑田參謀に寄せたる書によりて
五つ樽のこの酒部下に振舞へや阿蘭陀の書は木に
鏤めむ　黑田參謀より榎本氏に寄せたる書によりて

五稜廓今は落ちむぞいのち惜しと思ふは去れと門
ひらかしむ
狂花いろも一ときは紅々と蝦夷ヶ嶋根に咲き亂れ
つつ

松平近狂氏に　二首

世はつれなし人はなさけの無きものと思ひたまふ
な敗れたりとも
いつまでもただ生きること生きかたは如何にあら
うともただ生きること

少年の頃に、私は東京での同窓の先輩武田成章氏（函館五稜廓築城主任武田斐三郎の子）が、私に見せられたる殘

墟「五稜廓の記」から一種の寂しき感じを味ふたることありき

私は齢二十に及び、再び東京へ修學のため、故郷を出でて神戸に來り、故ありてべうたる兵庫縣屬となりて地理課に勤めてゐると、「五稜廓の記」の主人公とも云ふべき榎本武揚氏が公使としてロシアに赴任すべく、そこの某旅館に便船を待たれたることあり。私は私の知れる先輩松平近狂氏(名もと右京なるべし。姫路藩執政河合漢年の嫡孫の子)がその傍に居らるるよしを聞き、一度氏をたづねて、そして敗殘のヒーローに會ふことを得たるが、その時また私は寂しき印象を經驗したりき。

その翌朝、松平氏縣廳に見ゆ、私は直に氏を縣令及び書記官らに取次ぎつ、彼等は隼人の薩藩人なり。當時藩間の人々は販張ることより外知らざるが如くに生活せり。故

に榎本氏が乘船の際にも遂に影だに見せざりしなり。これが又私に寂しき印象を與へたり。

私は程なく浪速に去り、しばらくありて、そこから出京しつ。何程か經てからであり。榎本氏の作

長林煙雨鎖孤栖。　末路英雄意轉迷。　今日弔來人不見。　霸王樹畔霸王啼。

と云ふ他の敗殘が隱れ家の跡の詩的寂寥の情景を歌うて、自己の生涯にあはれを含めたる如き絶句の手跡を得て、なりふしは之を屋壁にかかげて、ひとり往時の神港旅館の夜話の情況などを憶ひ浮べたることもありし。

敗殘のヒーロー榎本氏は、明治四十一年の秋に病みてみまがれり。殘墟「五稜廓の記」の著者が、さうの昔に亡くなられたることは、その親族古澤秀彌君によりて知りぬ。知らず、憐むべき敗者松平近狂氏の今なほ健かにおはする

やおはささるやを。悵々不盡。壬子晩夏舘山にて　林外生

附記

松平氏にかつて榎本氏に贈れる一つの漢文章あり。その文章には(文章は「日本新聞記者列傳」に掲げあり。筆禍を得たることは「筆禍史」にあり)榎本氏が回天等の八艦船を率ゐて、まさに品川灣を脱せむとする際に、氏が榎本氏に艦上にて別れを告げて、それより忍ヶ岡の彰義隊に赴きのち捕はれて永き間囚人となりたる等の悲壯の情況が述べありて、なかなかに悲しと思はれる文章なり。

大正二年

洛陽の酒徒に

浸りたる酒の匂ひと酒のしみは乾すも落つまじ君

がからだから

おくつきの歌

おくつきに寂しさ添ふるばかりなり白き菫の一と莖咲きて

大嶋にて　三首

花ざかりの椿の蔭に兒らが地に髪流しつつ踊りてをるも

詩の袋にこれの自然と悅びと魂とを込めて歸らむか我れ

あの少女はこの嶋の花美しあの少女產みたるこの嶋の花

我が春は海のごとしと思ひしに一瞬のまなり顧みすれば

、

我が心を動かせるもの啓かせるものありやと立ちぬ巷に出でて

友に

罌粟の花は麗はしよとて雲南の阿片ばかりはな喫みそ我が友

、

くすくすと忍び笑ひすいつもいつも酒に染まりし

友が顔見て

上總にて　二首

ふりにし廢墟の丘に輝やかしく黄いろの麥の波が打ちつつ

蔓草の延へし石がけの崩れめに虹色の蜥蜴遊びてをるも

雲水の托鉢僧に

水のごと流れ流れて雲のごと行き行くか宿はからずして僧

、

熱ければ寢ころびながら書を讀み倦めば唄などう

たうて見るも

、

かがなへば君と酒の味歌のちから語りしははやふた昔ぞも

、

夢のなかに幻のごとき夢見たり影の影かも美しけれど

、

蔓ながらの赤き烏瓜を手にもてる友と出會ひぬ小橋の袂

、

秋の日は黄いろにかげり秋風はどこからか來て黄いろに吹くも

日光に遊べる時　五首

夜くだちにお花畑をさ迷へり月の光りにあこがれて我れ

堂の檐ゆ落つる雨滴を呑まく欲り怪獸の樋ひ頭擧ぐるも

紅葉の樹に叫ぶ聲と靈廟の裾にただよふ音の怪しさ

眠られねば夜半に山僧とちろりの酒起きて温めて語りけるかも

鬼怒川は虹色のごとく煌(きらめ)きて蛇のごとくにうねり
たり見ゆ

、

雨雲が風と走れりほころびから只三粒ほどの雨を
落して

、

一と杯(つき)の酒にゆらゆらと詩の友は眼が眩(くら)むとて横
たはりしも

運命の歌

歩りく我が足に蔓草(つるくさ)のやうにからみ引き倒すかも
なむぢ運命(さだめ)は

、

墓のうへに咲きたる秋の草花は美しうして憐れな
るかな

、

うららかなる小春日和のつづく頃友が菊見の招き
に行くも

、

生活の河の流れの深さ浅さ想ひと違ふ渡りて見れ
ば

、

こよひ月は美しき面(おも)を皆見せて我がふみの窓を覗

きけるかも

、

少女らが帶をし織ればその機(はた)よりリズム燦(きら)めく金絲銀絲の

郊外に遊びて　二首

ふりにし樹より落ちたるいが栗が溪の流れに浮きて流るも

田のあぜに案山子(かがし)のやうにわれも立ちて稻穗啄(ついば)む雀ら見つつ

閭中摸索

もちて生れしその賜物の知りがたなさ黑闇(くらや)みのなかを未(まだ)さぐりをり

友に

なほ忘れじ多摩の河原の美しき秋のある日のそぞろ歩りきは

、

死神の召使ひとふわづらひに苛(さいな)まれては嘆きつるかも

旅にて

秋されば村社祭りはお神樂(かぐら)に原始時代の名殘り見せけり

、

危ぶきかな只一と筋の髪の毛に釣るされてあり世界のことが

在原業平の繪姿に

君が歌は美ししかも面白し面白うして悲しきかなや

あらしの歌

海のやうに遠鳴りが聞こゆ處女林（をとめばやし）を冬のあらしが烈しく打てば

大正三年

地につもれる花踏みゆけば踏むごとに甘き匂ひが立ちにけるかな

向嶋にて　二首

夢のなかに見たる人をばけふ見たり花の向嶋の堤歩りきて

春は夢のごとく流れむ花の若さ花の美しさ君描き置け

荒川の水の絶えざる限りはよ花を見に來む小舟漕ぎつつ

春の宵酔へる人らし我がかどを酒の小唄をうたうて行くは

雲雀の歌　二首

歌ひつつ舞ひつつ高くあがりたる雲雀よ落ちぬ礫(つぶて)のやうに

雲雀、雲雀、いつも忙はしげに歌ふことよ、うらからかなる日は静かに歌へ

春の夜はバルコンによりて軟らかき薔薇の匂ひに酔ふが樂しさ

某女史の墓を過ぎて

生(ᵢ)のあひだに一たびは咲く花ばらの咲かずて果てし哀れなる君

紫陽花の歌　二首

わが妹は廢園にな行きそあぢさゐの花の蔭には蛇のい寢れば

夢みるごと丘のなぞへの紫陽花の花と花とが映え合うてをり

江戸川にて

夢のごとしこの江戸川に菖蒲咲き夜は螢さへ飛びしむかしは

外濠にて　二首

外濠のゆたに湛ちたる水の面に羽根を觸れつつ燕の飛ぶも

濠端の草の色とけて緑なす淵に潜ぎす鳴のたのしさ

利根川の圖に

母なる利根わが憧がれの利根こそは吾妻の川のなかの大川

常夏の花もつ蔓の葉の繁みに玉と輝くは玉蟲ぞこれ

あす知らぬ蜉蝣のごときカフェーの化粧の女見れば悲しも

白雨の過きし緑の草原に眞珠の玉のかがやけり見ゆ

上總にて　二首

林の裾廣き草地にゆつたりとまだらの牛がここだ寢てをり

廢墟の隅の小屋がけにただひとり襤褸着の尼僧經よみをるも

夏の朝露のかがやく草踏みて歩りく流れの岸の涼しさ

郊外にて

黄金(こがね)いろの稲田のあぜを我が行けば蝗とびつきて袂にも入り

、

夢のやうな聲もて語る夢をもつ夢の女が優しき夢を

、

丘の寺の鐘の仕舞ひの音長しゆらゆらと響く細きその尾が

友に

磯濱の磯傳ひしつつ歌ひしは今宵のごとき月夜なりしかも

、

電線の柱のうへよあけぼのに來鳴く白鳩の聲のをかしさ

、

女郎花多摩の野(の)天(てん)にだらしくなく吹き倒されてあり西吹く風に

、

居ごこちよし獨り暮らしの君が家背戸は武藏野う

けらも咲きて

林檎の歌

人の造る象牙細工の林檎よりおのづと熟れて落ちたるをこそ

船頭の言葉

石狩の燕の濱に妹を置きてほろと泣きつつ船出せしかな

、

冬の夕陽は學びの兒らが歌ひつつ返る村路をひとり照らすも

、

すり切れていのちの針の止まりたる時計の屍見るが悲しさ

友を悼みて　二首

何すれど友は死したるかなしき春光りかがやく陽もあるものを

かたみとて友が遺せる書悲し表紙の色の褪せたるもはた

更新の歌

ねがはくは年ごとにあらず月ごとにあらず日ごとに生れ變れ我れ

、

神に會うて神にもの云ふ人のありしいにしへの世
のこほしくもあるか

、

ふる郷の冬はここより寒からじ梅の咲く日もあま
た早しぞ

人形師に

花のやうに少女を仕上げ陽のやうに少年を仕上げ
世に送るかも

、

この夜一と夜明けば明かるき笑ひ聲が旭紅の空に
漂ふらむか

いくさの歌、世界の

火と劒の世とはなりにけり神々が眠りたまへるこ
のごろのあひだ

大正四年

、

漂泊の友の姿がをりふしは我が憶ひ出でのなかに
見えつつ

友に

異國の異花を見て來たる君も美しと見むさくらの
花は

櫻ばなは散りたくて散りたくてならぬらし母なる
大地のふところのなかへ

、

山下の谿(たに)地の椿咲きさかり谿の底まで照らしける
かも

植物園の温室にて

酒の醉ひの甘さおもほゆ温室に熟き異國の蘭の花
見て

東郊に遊びて

ちちと鳴き江戸川くだる筏師の肩をかすめて飛ぶ

燕かな

、

青春の心に生きむ何がゆゑにこの世はかくも美し
きやと

野の花の歌

遊子われらを慰めむとてか星のこど野に花咲けり
優しくもあるかな

、

なに思うて咲(さ)まひするかもこれの少女春戸に眞紅
の苺摘みつつ

イタリー人某を悼みて

いくたびか生れ故郷のイタリーの美しき夜をほめし君はも

いなづまの歌

火の柱を黑雲のなかにいなづまが立てて閃めく横にしてはた

常陸にて　二首

窓のすぐ前の葭野に紫紅色の小鳥飛び飛ぶ鳴き交はしつつ

背戸の沼に夜ふけてころろ鳴く蛙しじま破りて聞え來るかも

夜の大川堤にて

ここだくの船のともし火の美しさレストランには糸の音して

旅にて

この山の寂しければか我が來てより百日經つごとし二日經たぬに

屈原の肖像に

君が詩はあまりにも悲し象徴の詩とも見るべき離騒も悲し

旅にて

頽齡の村によぎりて頽齡の人らを見れば涙ぐましも

我がまぢかに迫り來ることが一つ一つ豫(かね)て心に映(は)
えばよからむに

、

熱きかな鉛のやうな眠氣もてわが瞼(まぶた)こそ押えつけ
られ

旅にて

雜草に埋づめられたる村の墓場友のひとりがここ
に眠るも

、

かむかへりがころころと啼く洲のなかの葦の繁み

にころころと啼く

下田にて　三首

我が漕ぎゆく小舟のそばを雪のやうな白き鷗がそ
うて泳ぐも

砂のうへに横たはる船の鹽錆びし船腹よ波が來て
洗ひをり

我が足を拂はむと波の寄せて來る濱べ面白し歩り
きつつをれば

某音樂師に

詩人(うたびと)の歌ひ得ずとふ言の葉を絃(いと)は語るか血をそそ
るごと

美しき夜がわが窓を覗きけりやさしき目もて誘ふ
ごとくに

、

山の靈と語り合ふのも面白し、と思へど都離れが
てにして

友に

醉ふ時はいたるところに初戀を語りて君は彩か添
ふらむ

、

雪のこど白き人造の石の橋に月の光りが閃きてを

り

千鳥の歌

銀色の霧のとけゆく川の上を鳴きながら飛ぶ千鳥
愛しも

、

よそよそしく冷たきふりをせし人がけふはなぜか
も頬赤らめつ

旅にて

白菜のばりばり鳴るのと麥飯と產み立ての卵喰ふ
が嬉しさ

、

朝晩に見るが苦しさ街道を歩りく人たちの疲れたる顔

、

我が心の窓打ち開けて待てど待てど射し込まうともせず日光弱しも

友に

茴香の酒飲みながら阿蘭陀畫を話せし君にひさに逢はぬかも

放浪の子に

乳と蜜の流るる地をば夢に見てその夢を追うて走る子あはれ

、

木の葉落ちて冬のはじめのおとづれのこがらしは我が窓を叩くも

職工の言葉

一杯の酒をば飲みて寢たる夜は夢やなむどは見たることなし

、

よきにもせよ惡しきもせよ君や我れは此の世なる間は歌うて遊ばな

雪の歌

聞くならく雪は異教の神たちがむしりて投げし鷺

烏の羽根と

大正五年

陶醉の歌

陶醉に身をば委(まか)すかくよくよと泣き濡れむよりは
と身をば委すか

、

家は皆まだも眠りに落ちてをれど我が曙はほむの
りと白し

、

けふ小金井あす荒川と春の頃は花を見ることが日

課なりぬ

、

なつかしげに燕がちちと鳴きながら向つ海から來
始めにつつ

友に

君が心のなかの新しき天地(あめつち)に詩の花が咲けば嬉し
きものを

、

草をもて束ねしたけの黒髪に紅椿(べにつばき)挿す嶋をとめは
も

はるさめの歌

しだれ咲く海棠に降る春雨の粒の暖かさ花の艶やかさ

小鳥の歌　二首

小鳥、小鳥、さ躍る小鳥汝が自由に世の人われらいかで如かめや

小鳥らは名殘り惜むらし春の歌を初夏の森になほ歌ひつつ

、

乳房ほどなつかしきもののあるべしや「ゴムの小枕」やむわりと膨れ

、

わかき春はおほかたは酒に流しけり君が知るごと詩に耽りつつ

、

佳き書を讀みて明りをつけまく欲り心の暗き隅々までに

、

百合の花のごとく愛くし野をばゆく五月少女を陽ざしに見れば

、

生き物を苦しめむとて網を張り待ち歡ぶは蜘蛛のみにあらじ

旅にて

出窓より眺めてをれば白き靄が小流れの橋のうへにのぼるも

箱山にて　三首

暖かき砂地を虹の色したる蜥蜴走れり我が影を見て

海燕が、ちち、ちちと鳴きて懐しげに磯濱の磯を離れず飛ぶも

濃き靄のなかをゆら〳〵と幻の船のともし火走り行くなり

夏の陽ざかり釜に煮たぎるアスアルドの匂をかげば胸むかつくも

博士號を得たる友に

人々のいまだ知らざりしことを知りいまだ言はざりしわけを言へ君

旅にて

夏の旅に民の謠をば問ひつ聞きつ海のさちにも山のさちにも

友に

水の郷に君と與ある一と夏を過ごせしむかしわれ忘れめや

、

秋の夜の初つ寒さ思ひ妹はわが書の窓にもとばり
引きしか

、

つくづくとわれ味ひぬ魂の疲れさてこの頃の夜の
長きこと

、

月の夜のさなかに見れば山の影は曠野を廣み這ひ
出づるごと

、

いつまでもいつまでも人は生くべきや死はそばに

ありおくつきもはた

こほろぎの歌

あてもなく單調な歌を蟋蟀がくりかへし歌ふ秋は
來にけり

陶淵明の肖像に

東邦の田園の詩の祖と仰ぎ灌奠には酒よ菊もまゐ
らせ

林檎の歌

林檎見れば上枝艶やかに下枝の果は美酒のごと匂
ひするかも

、

大きさと力に滿ちし神の世の神の生活(くらし)は讃(たた)ふべきかも

西郊に遊びて　二首

豐多摩の夕べ野の石に腰おろして流るる星を眺めつ我れは

多摩川の堤のうへの君が家に月を歌ひしむかし思ほゆ

、

死にも遠く墓にも遠く狹蠅(さばへ)なす浮世にも遠く生かまくの欲り

、

土手の藪にここださがれる烏瓜と夕陽合へ照れり赤しとも赤し

託兒所を見て

たらちねの涙こぼれけり緣兒をその乳房からもぎ放す時

、

詩にも繪にもとても描がけぬその美をば君が微笑みのなかに見出でつ

、

澁面の十一月よ二月まで遊子われらも咲(ゑ)むこと稀れぞ

陸奥の雪の旅路にくれなゐの草苺喰べつ珍らしきかも

年は雪よりつもれる猫がをりふしは踊るを見ると婆が強語り

ふる郷の南の國の戀歌をみちのくのはてに聞けば嬉しも

陸奥の雪の夜がたりの面白さねをねをと猫の聲さへ眞似て

鳥海山腰に雲まけば雨ぞふると船の船子が指ざして云ふか

鳥海山我がなつかしと見さくればサフラン色に夕榮えにつつ

友に

美しき君が壯春をみちのくの雪に埋づめて置くが悲しさ

小野小町が傳説の生地を過ぎて

虹の上を渡る小町の美しさふり向きて我れに笑顔見せしも

小町紅の歌

薔薇の花の濃きくれなゐも小町紅にその輝きを失ふらむか

憶ひ出で　二首

年とれば憶ひ出と酒が寂しさを慰めむかも憶ひ出と酒が

幻を胸に描きてわかき春の頃よさすらひし涙速あたりを

冬なれど日當りのよき丘の隈に綠の色がはや見え初めつ

第五編　菫と蒲公英

第五編　菫と蒲公英

大正六年

死の町にて　二首

病める我が養生するに靜かなるこの死の町はふさはしきところ

針のごと尖る神經に聞えしか羽根うちて飛ぶ魂の音さへ

大津在にて　三首

近江路の春よりは我が播磨路の春はいささか暖かならめ

花が散りてしまへばここは寂しからむ水の流れと
山のみにして
ささなみの滋賀のあがたに知り人をたづねがてら
に山櫻見つ

長濱在にて

あの石にいかなる魂のやどりけむ注連はりて花の
立ててあるなり

、

美しき夢の匂ひが我がまはりに漂ひにけりきのふ
もけふも

少女の歌　二首

姿さへはた心さへ花のやうに美しきかな少女のこ
ろは
花の都一とたび見れば失はむ里出でし時の少女ご
ころは

、

愛しけやし君が描ける三日月の眉こそ青く若々し
けれ

螢の歌

夜の道を行けば照らすがに草むらにあまた螢が火
をともしつつ

、

踏み出でよ一と足なりと大自然の力を讃へ一と足なりと

、

いづくはあれ人の造れる神を見るにいかにいろいろの神のあることよ

、

世の中のいぢらしきものは少女子が涙のなかに見せる笑顔かも

白濱にて　三首

身を砂洲に仰むけにしつつ青き海のうへに漂ふ白雲見つつ

子供らが雲母輝く砂の山を並べつくりて高さ競ふも

我が走れば黑雲追ひ來はらはらと雨をふらして黑雲追ひ來

、

夏の夜の美しきかな露と共にかがやく星がここだ落ちきて

憶ひ出で、友に

潮來出でてばらばら松にわかれしか君とある朝のしらしら明けに

下總にて　二首

見はらしの茶屋に晝寢せり少女らが沼に菱採る歌
聞きながら
目ざむれば陽はいつの間にか落ちかかり山は紫の
色となりつつ

秦淮夜泊の圖に

後庭花歌も多きにこの歌を歌ふは誰ぞとたづねま
く欲り

圖に杜牧の詩、商女不知亡國恨、隔江猶唱後庭花とあり

、

詩にも狂へ歌にも狂へいにしへは世に迷ひける神
もありしぞ

、

我れを我が夢のなかにし見たりけり十七八の書生
姿の

、

ここだくの鳩のなかに立ちにこやかに豆撒く子ら
は神の愛兒(まなご)か

、

廢園の雜草のなかにころころ、ころころ、夜ふけて蟇(ひき)
が鳴けば寂しも

、

死の街を小銭乞ひつつよろよろとうろつくぼろに
秋の風吹く

雑司ヶ谷にて

鬼子母神のそばの掛け茶屋に腰おろして紅き柘榴
の肉を喰べつ友と

、

即興の悲しき歌をくちずさむ戀に死したるお七が
墓に

旅にて　二首

向つ峯に雲のかからぬ日はあれど我が心熱の出で
ぬ日はなし

いささかのことに驚きいささかのことに涙を流が
す頃かも

、

少年の頃の日は長し一と月は今の十とせに當るや
うなり

酒徒の言葉

悲しびのあまりに酒は飲むなりと胸を叩きて酒徒
が云ふも

旅にて

秋の長夜話し上手の里男が慰めくれつ戀がたりし
て

、

新しき文化を知らず夢のなかに三千年からも眠り
しよ國

、

熱病の夢のやうにも思はれつ血氣ざかりに我がせ
しわざは

風の歌

風が云ふ風も人のごとしすすり泣きと笑みと憤り
とゆ出來きたるものと

、

垂乳根のねむねの唄に眠りたるころの懐しさあて

どもなしに

、

ふる郷を捨てて出でたる我れなれどふる郷のたよ
り聞けば嬉しも

、

お互に心もち一つ言葉一つ目つき一つが嬉しきも
のぞ

、

百八の鐘は始めの一と打ちと終りの音を聞きしの
み我れ

大正七年

あこがれの歌、友に

新しきあこがれにこそ魂そそげふるきあこがれは
打ち棄てて君

、

凧が飛ぶ春風の糸につながれて空をあてもなくひらひらとただ

、

庭に散る花を美くしみ一つ一つ駈けづりて拾ふ兒らが愛しさ

、

我れも病みぬ君も病みしか今宵この美酒をさへ飲まふともせず

講に

大寺の庭に花を撒き花を撒きていたいけざかりの兒らが踊るよ

、

桃の花がしくしく落ちてあてもなく水の流れに浮び流るも

、

美しき小鳥と呼ばむ朝なさな目覺むるごとに歌ふ

少女を

雨の歌

咲くまでは花を咲かす雨咲きてからは花を散らす
雨と詩によまれしも

、

摘めるだけ摘みたる草の花を皆かへるさに川に投
げ捨てつ兒らは

、

松原のなかに去年投げし石ころは落ちたるままに
今もあらむかも

薔に

緑兒は搖籃のなかに唐獅子は牡丹のかげに甘睡せ
り見ゆ

、

病魔のゑじきたるよりは戀に狂ひ戀に死したるが
まさりたるらし

、

いつも我が夢の寂しさ我が姿一つのみ見し夢のな
かにして

、

葉ざくらの蔭に消えたる長き土手に馬子が唄聞こ
ゆ追分ぶしの

、

生垣に白き夕顔がしなやかなる蔓をからませて淋しく咲くも

、

朝なさな牛に草をば喰ませたるふる郷の丘のなつかしきかも

、

陽熱み犬さへ鶏さへ木の葉さへ風さへもみな寢とろけてをり

旅にて

いつの間にか萱原の萱は伸び伸びて我がからだより丈けの高しも

、

この如き美しき夜の光景は美しき詩に描くばかりぞ

、

な觸れそ我が傷はわれなほすべしわれを殘して友よ皆行け

、

死者の名は記念すべしと墓標立てて土をかけけり涙まじりに

、

秋風の音立てて吹く芥箱にぼろの子らしきがもたれて泣くも

秩父にて

我が枕に聞こゆる溪のせせらぎは妖精の笑ひこけるがごとし

友に

生死の境にいつも跨りて支那に遊べる君をしぞ思ふ

旅にて　三首

たより嬉し田舍に家を建てしからに遊びに來よと親しき友の

けふよりはしばし暮らさむ山の家に寂しき鳥の啼く音聞きつつ

山かげのさざれ畑に馬鈴薯を掘り返しをる翁の寂しさ

、

カフエーの夜の華やかさここだくの灯がとぼりけり花輪のなかに

友に

インドへ行け孔雀の鳥も飛び廻り食ふにこまらじ椰子の實もあり

星の鳴るを夜のバルコンに我が聽けばここだ輝き
てさら、さら、さらと

、

美しき兒らがまなざしは寶玉の響きを立てて居る
が如きかも

獏の歌

佳き夢は殘していつもいつも我が惡しき夢をばみ
な啖らへ獏

、

うつそみの荒風にもし觸れもせばうすもののごと
き妹か破れむ

、

ともかくも燒酎ばかりはな飲みそそは呪はれたる
奴のみが飲む

、

世の中は狹しとも見えをりふしは廣しとも見えさ
てもをかしや

、

大げさに物な始めそすこしづつ始むるがよし物を
少さく

、

かりそめの旅と詠みたる友の歌がながの別れの歌

となりしか

萬葉集の東歌を讀みて

民の謠は型も情(こころ)も愛(めづ)らしく面白きかな讀めば讀むほど

運命の歌

運命の歩みとふものはいにしへの大き聖(ひじり)も知らずやありけむ

、

夜があけしと我が戸開ければ月が昨夜(よべ)の白雪のうへに輝きをるも

大正八年

、

日と月とのめぐりよりか星のなかよりか年とふものの流れ出づるは

、

梅の花は綻びそめつ美しく晴れたるけふの午後の陽ざしに

、

初咲きのさくらの花は墓のなかに寢てゐる友も見が欲しからめ

いにしへは人と親しげに鳥も花も語りしといふこ
ほしくもあるかな

友に

君が今受くる惱みは後の日の心慰むるすべとなり
なむ

畫に

少女らは蝶にまじりて草原に蝶の如くに花さがし
つつ

いつもいつも心柔らかに魂ひは喜びのなかに浸り

てあらなむ

旅にて

野に向ふ窓押しあけて朝あけの雲雀の歌を聞くが
嬉しさ

椿の花の歌

玉椿白と紅とがうちまじり瀧つぼのなかに落ちて
つもるも

旅にて　二首

旅をせばひとり旅こそ面白けれ我れを自然と詩が
待ち居れば

詩人はまぼしろを追ひ巡禮は光りを追へり同じ旅

路に

、

彼が顔の型の珍らしさ詩に惱むボオドレエルを見るがごときかも

、

にこにこと嬉しげに笑(ゑ)みて幼兒(をさなご)は眠りの國へ行きにけるかも

、

燕子花(かきつばた)見に行かぬかとむらさきの曙にわれを友が來喚びつ

、

ありありと我が眼の前に浮び出づ戀に惱める友の姿が

、

牡丹の花ざかりのころ本所に君を訪ひしもはやふた昔

友に

忘れめや酒の風味と君が背戸の畑にとれし苺の色は

ダンヌンチオの詩を讀みて

南歐の君が情熱の詩に醉ひぬ柘榴花咲くこの頃を我れ

晝に

人と埃(ごみ)との臭ひの浸まぬ領ありや、と思ひつつ入
るか山の奥へは

鳩の歌

おお鳩ら屋根の瓦をすれすれに飛び廻る鳩ら熱く
はなきや

鴉の歌

おはぐろをつけたる鴉飛び來り何を知らすかもけ
さも鳴き鳴く

、

おのづから亂れし髪を人の見て寢亂れ髪とはやさ

れて泣くも

、

柔らかき琴の音色を聞きながらうつらうつらとね
むりけるかも

館山にて　二首

行くへ告げず漕ぎて往(ゆ)にたる友が舟は野嶋ヶ崎の
靄にかくれし
我が心も碎けつ沖の黑き岩にあたる白波の碎ける
を見て

米騒動の歌

餓ゑのあまりに騒き立ちたる人々に豐かに糧(かて)を賜(た)

びたまへ神

、

夢のなかに隠れまく欲り遊びにもはた仕事にも草
臥れつ我れは

、

つつまやかに殘りの生をば片田舍に送りたまへる
君がゆかしさ

野邊送りの歸るさに

おくつきに友のひとりを殘し置きてかへるさの途
の寂しくもあるか

運命の歌

運命をもて遊ぶものは神ならめその神の名と顏の
知らなく

、

河見れば早瀨の石に月あたり粉のやうに碎け閃め
きにつつ

、

しつとりと露に濡れたる草地踏みて友の墓へ行く
朝靜かなり

友に

地の端へ行くべきけふの君が船と波止場のさまを
我れ忘れめや

畫に

青豆を撒くごと神が瀬戸の内の海のなかにと撒きし嶋々

旅にて

一里塚の石はむかしのことと知らむきのふ見しごと話しもせぬか

、

我が瞳に大海原が湛ふなり島ゆかへりて月經たる後ちも

、

とこしへの神の掟さへやはらげが時代によりて變はるものかも

、

この別れを永の別れとな思ひそ死にて別るる別れならねば

、

喰べ物の滿ち足らぬ國ぞ穗拾ふ子をあたまくだしに叱りたまふな

、

友が住む雪のシベリヤの曠野をば想ひ起せり小唄聞きつつ

、

君知るや我がこころどの寂しさをあの居酒屋に酌
みて別れむ

、

人の生を味ひ見れば味ふほどいよよ深うして底の
知らなく

、

酒温め冬は爐のそばに落つきて話しするより樂し
きはなし

大正九年

土の歌

珍らしき今日の暖かさ庭の黑き土やはらぎぬ春は
立たぬに

、

うららかなる心もて見つうららかに咲ける櫻をう
ららかな日に

山寺にて　二首

山門の花はちりぢりにならむとす來て見る人のな
きが寂しさ

人と埃のなかに住むよりは靜かなるこれの自然の
ふところにこそ

畫に

鶯塚ぬしは乞食に戀ひしたる町の愛しき娘と云ふか

途上にて

しかとしたる覺えなけれど子らが歌ふ唄はどこかで聞きしやうなり

粕壁にて　二首

生の半ばを寢てしまひしと思ふぼと藤浪の花のかげに眠るも

まへの村の庭鳥の聲の尾の長さ、うしろの村に吠える犬はた

友に

君や我れに詩と音樂と劇と繪とがなければ此の日堪へられぬかも

、

我が胸のなかに悲しき啼く音ありほととぎすかも血をや沸ぎらす

、

花ばらの蔭の窓からフランスの小唄歌ふ聲が流れ出づるも

畫に

花滿てる五月の野邊に蝶を追ふ支那の少女の柔婉なるかな

、

われゆゑに歌ふ緑の南(みひなみ)の國の民の謠聞くがうれしさ

、

成るならぬは措きてな間ひそ初戀は忘れざるべし墓に入るまでは

杜子美の肖像に

國破れて哭(な)くべき身なり山に河にふりにし城に春を歌うて

、

この頃は死さへ病さへ孤獨さへ忘れがちにて日を

送りつつ

、

夏の眞晝銀座通ればただよへる柳の氣息(いぶき)重ぐろしきも

、

年ごろの娘もつ親のこころづかひ聽きて涙す君が話しに

、

君と我れの間に一つ美しきローマンスとふものはあらぬか

、

今の我れを昔の我れにくらべては頰を紅くするをりもありしぞ

燕の歌

京にのぼり紅をさしたる燕はかへるさにさらに鹿の子着るとふ

、

おのが顔をおのが摘み來し草花のなかに埋づめて泣く少女あはれ

白濱にて　三首

明日は安房の鋸山にのぼる陽を見つつ來たまへ白濱の磯へ

よべの夢よ荒れすさびたるアラビヤの流砂にひとりさ迷へり我れ

熱き陽の下に砂を握り砂のなかに埋づめ合ふなり子らが濱にして

、

死は罪と醜きものを皆消して美しきものを殘してゆくか

蒙古人某に、某は大銀杏寺に宿れり

二千年も齡經つらしき大銀杏の蔭に坐わりて書をこそ讀め

常陸にて　二首

利根川の水の流れは變はるとも筑波の嶺はとこしへにこそ

我がこころに翼生えにけり清き月の照れる筑波の嶺にし立てば

、

落日の光りを追うて讀む本のうへに銀杏の黄葉落ちにけり

旅にて

子守らがねむね、ねむねと歌ふなべに幼兒のやうに眠りしか我れ

、

秋風がこころど吹きぬ冷々と漂泊の人のこころど吹きぬ

旅にて

明けがたの月の寂しさ向つ峯の吹きざらしのうへに面傾けて

、

人の生のわかりがたなさ年はとれど今もいろはの讀み始めかも

、

友とふたり黄昏の道を歩りきつつ黄昏いろの話し交はしつ

播磨風土記を讀みて　二首

ふる郷の山と川とに憧がれて披きても見つ播磨風土記を

花のごと播磨のそらは麗はしし人は鳩より和やかにして

、

死は悲しいかなる人もいつまでも生きては居れぬものと思へど

、

悲しパンを稼ぐ道なしと惸獨がとぼりとぼりと歩りけるかも

、

なにもかも歌にうたへば何となくおほほしき胸が晴るるここちす

、

金泥で塗りし木佛と粘土燒きの惡魔を床に並べて見つつ

太陽禮讃

けふといふ日にもけふをば照らす陽にも禮讃の歌をささげむか我れ

、

風寒く木の葉ことごと落ちしからに落ちて來るが

に見えにけり星

、

長く長く君と話しをなさざりし雪の零る日は來たまへ宿に

旅にて

何か知らにあこがるるもののあればにや出でても見たり雪の野原に

、

君にしろはた我れにしろ人の生は紙のうへにて知りしばかりかも

、

聞くおのが心からかも此の夕べ上野の鐘の音おもぐろし

大正十年

櫻花の歌　五首

櫻ばな白きがうへにほむのりと染めし紅らみの色の麗しさ

人皆は花に歌へり病む我れは泣きはせねども歌はずにをり

病むといへど何むのさきはひぞ花に昨夜我が夢さへも彩どられけり

花の咲きて散りゆく際の短かさにくらべて見れば
長かりし生ぞ
又さらに我が生嘆かじゆたかなる花の微笑みに力
得しかば

、

麗かなる春の日和は十日前よけふまで長くうちつ
づきつつ

友に

胸の中にいつかは愛が流れ來むあぐかれ多き君に
しあれば

、

夢をもつ女なるらし市のなかを夢のなかをば歩る
くごと歩るく

旅にて

たむぽぽの黄に紫の壺すみれ兒らよ牛やるな喰ま
まくの惜し

、

ばらの花を手にはとらずて籬高みばらの棘にて胸
さされたり

プーシュキンの詩を讀みて

君が詩よ星さながらの光りもて百合の姿に咲くが
け高かさ

秩父にて　五首

陽出づれば仰ぎて讃へ陽入れば俯してことほぐ此の里の人ら

戸を鎖さず外見をも張らず里人は日がな一日歌ひ暮らすも

桃の花下照る井戸ゆ噴き出づる清水に濯ぐ兒らの愛しさ

なつかしや孩兒眠らするねむねの唄我がふる郷と節も變はらず

此の里の自然のなかに足とめて自然讃ままし心のどかに

慣はしと癖とをいつも憎しとは思へどいまだ改めかねて

長き間忘られてゐし柔らかなる浪速の言葉聞けば嬉しも

廢驛を過ぎて

戀の蔓を古き石垣のほぐれより投げて卷きしか人の通れば

落ちつもる椿の花にせかれたる春の小川の流れ渡

らふ

旅にて

山人となりしここちすこの山のなかに來てから二日過ぎなくに

、

手内職をよすぎとなせる裏借屋の壁にかかれる琵琶は誰が彈く

、

利鎌もて醜草刈らなこころどの奥にはびこる醜草刈らな

、

憶ひ出をな呼び出だせそ病院に果てたる友の死にざまを述べて

利根川の堤にて

雨晴れたる朝さまよひつ土手に生ふる優しき草の匂ひ嗅ぎつつ

館山にて

おもぐろしき波の音かな闇の蔽ふる海の底より打ちあぐるごとし

船形を過ぎて　三首

漁師らが家の慘めさここだ穴のある藁屋根に草生ひにけり

海荒るればしぶきのなかに跪き漁師の妻ら泣きて
祈るも
わだつ海の暗き波間をおくつきと選びて入りし人
の哀れさ

、

太陽の光りまぶしき前にしてまぶしき唄を歌ふ子
や誰れ

畵に

たぐるべきことをば知らに李三老は手綱長しと馬
の尻に乘り

、

あはれ、あはれ膝折りしままぞアジアの地文化の
祖(おや)のインドは今も

、

草原の草が雨をし待つがごと待てり感興の落ちて
來たるを

旅にて

切られ木のとどと倒るる音すれば向つ峯(を)眺む我れ
杖立てて

、

いの寢らえぬ秋の夜われを訪ひ來たる思ひ恐ろし
はたや情(なさけ)も

友に

人が何と云ふとも我れは我れなりと輕く笑うてな
採り上げそ

某女史の追悼會にて

噂して涙こぼしつなつかしき友がかたみの前にして皆

旅にて　二首

道問へば野風わたりて野少女が返へす言葉を吹き拂ひけり
涙ぐまし奇しき才もつ友にして黄昏いろの生をば送るが

、
目を閉ぢて夢の花園想ひやり想ひやりのなかによみがへるかも
、
インドよりイタリーさして遊ぶ夢のさめし朝けはここだ嬉しも
、
浮び出づる戀の幻を見つめをる人の肩をば叩くは罪ぞ

友の言葉　二首

片田舍が子供らによしと別るるとき友は寂しげに

笑みつつ云ふも
泣くわけは云ひかねますと友の妻が顔を蔽ひぬと
もし火の前に

問答の歌　二首

酒に醉ふと美しき戀の憶ひ出に醉ふといづれがあ
また樂しき
酒の醉ひは醒めやすきもの美しき戀ひの憶ひ出つ
づけむ我れは

雀の歌

雀らは宿しなければ三日つづき降れる大雪に凍え
死ぬるも

遠き遠きむかしの神の話して寢たればか見し樂園
の夢

第六編

インテリゲンチヤ

第六編　インテリゲンチヤ

大正十一年

風の歌

しののめの息吹きなるかも柔らかに吹き來る風は
しろがねの色

、

美しと見て狂ひけり微笑みも花もとこしへのもの
ならなくに

利根川の堤に遊べる時

淀川の春の堤を憶ひ出でつ利根の河べに草摘むご

とに

憶ひ出で、友に　二首

忘れめや君が四ッ葉のクローヴァの繪紙に書ける
優しき文は

君もわれもあれが戀文とふことを知らに月日をこ
こだ過ぎしも

、

自由とふものの象徴と小鳥らを認めたる時ゆいよ
よ愛しむ

飛行機の歌

飛びゆきて虹を渡るよ飛行機がざくざくざくと虹

を渡るよ

旅にて

亡きがらの灰の捨て場の土に咲く白き菫の花の寂
しさ

畫に

苺いろの紅き乳首が白妙の無垢のうすものの下ゆ
覗くも

友に　二首

別るる時君が振りくれしハンケチの白きが今も眼
に躍りつつ

今もかも蜜柑畑のなかを行きて血沼の碧海君見る

らむか

、

あすの夜にと話し殘すな夏の夜の短きよりも生は
短きぞ

竹の歌

若竹がかそけき寐息立てながら我が窓のまへに眠
りけるかも

、

忘るれば佳きことの多きこの世かもいざ忘れなむ
慾とねたみは

、

草も恨まむ渇く野のうへに一と粒の雨も落さずに
駈けゆく雲を

畫に

ひとりの美少女が手に持てる三つ莖の百合の花の
眞白さ

、

この世をば遁げるやうにも急ぎ逝きし友がこころ
のいぶかしきかな

旅にて

千葉の野と筑波の嶺を見はらして君が書齋に一と
日暮らすも

草苅り男の言葉　二首

鷄が寢れば俺もねべいや鷄が鳴いたら草を苅るべ
い野らさおれゆき
一つほか唄を知らないおれだもの同じ唄をばくり
かへすだよ

、

寢まく欲り竹の林の七たりの賢きが醉うて寢たる
姿に

、

草の葉に置ける白露の美しさ一つ一つに魂宿すな
り

、

あの夜のごと逸樂にまた我れ遇はじとむかし遊び
し須磨を語るも

旅にて

眞夜なかにふと起き出でて草原を月の落つるまで
歩りけるかな

、

フランスへか白樺の國へかあらず我が旅は心の新
天地へ

、

重くるしき溜息つきつつインテリゲンチャが黄昏

の場末ひとり歩りきつつ

友に

いかにして聲嗄れにけむ唄好きの歌はずなりし君
を悲しむ

、

月あかし庭の楓が白壁にさ迷ふがごと影うつしつ
つ

竹の歌

たわたわと背戸に靡ける今年竹その竹切りて笛に
もせむか

、

ひからびし我がたまひしにな拒みそ君が微笑みは
沙漠の水ぞ

、

垂乳根の乳はかれてもみめぐみのなさけの泉涸る
る時あらじ

湯朝竹山人君に

獨り身の君は寂びしさにけふもかも酒か啜らむ小
唄うたうて

運命の歌

試みの運命が來て試むともこらへて行かな我が生
の旅は

愛の歌

愛ありや此のはてのはて地の底の底まで落ちむと
云ふほどの熱き

、

雪の朝凍え死したる老いぼれの雀哀れと葬りしか
な

、

此の街の夜の道の寂びしさ月影に醉ひどれがひと
り歌ひ行くのみ

、

白妙の雪のうへをし行くやうに妹が心のうへを行
くかも

、

我が胸のなかに起れるラッセルが物言ふがごと聞
えけるかな

小野小町の繪姿に

人は君が眼をば詩と褒むわれはもや君が歎息を歌
とただへむ

、

千萬の年を長しと思ほすな一とまばたきの間とこ
そ云はめ

大正十二年

、

夜が白らむと起きて眺むれば花艶ふさくらのうへを星歩りきをり

野の花の歌

物言はずかしこだてせず野のなかに一と莖咲ける花のゆかしさ

さくら草の歌　二首

愛しき櫻草摘む少女らを見つつ草原のなかを過ぎしも

草原に咲きてあるこそ愛しけれ市に移すなさくら草の花

、

玉椿の花に花をば重ね貫きて首にかけたる兒らが愛しさ

、

青丹よし奈良のあたりの行く春を思ひ出でては惱む頃かも

、

我れを蔽ふ土のうへには一と莖の白き菫を咲かせば足れり

寫眞に

嶋少女の髪はしなやかにして長きかな解けば身を
被ひ地に波打たむ

友に　三首

あの頃の我が樂しびの憶ひ出では七里小濱の砂の
數ほど

われを送り君は來りし躑躅咲く磯の端より磯の端
まで

はなむけすと君がくれたる白躑躅の花の潔さを忘
れかねつも

、

泥水の池に咲きぬる燕子花手折りて袖を汙したも
ふな

、

人が卷く伊達帶を見ていにしへの四つ割帶を思ほ
ゆるかも

、

はろばろと黑百合の花賜ひたまふこころの紅き君
にもあるかな

、

墓町は戀なき末と思ひしに君が作れる詩の華やか
さ

生死の歌　二首

生きて居りて生きて居らざる如き今の我れはみづから愛想つかすも

生きることは樂しびなれど死ぬることも樂しびならむと思ふこの頃

旅にて

面白し湖の船子が歌ふ唄「艪ではやらひで歌で遣る」とふ

利根川の堤にて　二首

素足になり利根の堤の夏草のなかを歩りきぬ匂ひ嬉しみ

のむびりと腰をおろして利根川を上り下りの白帆讀みつつ

地震の歌、九月一日午前十一時五十八分の　五首

天の愛も地の愛も知らぬ我れらみなに思ひ知らせむための地震かも

九段坂のうへに一と夜を露宿してしらじら明けに赤坂へゆきぬ

天幕張りて七日の間地震を避けつ青山學院のうら庭にして

一と地震がしづまればまたつぎの地震がゆり直すとて危ぶまれつつ

薄絹のカアテンのゆらぐやうに世の人の心もゆらぎやすきか

我が家の焼け跡を見て

大地震は我がこれまでの生活の煩ひを振るひ落せしぞ皆

夜、天幕を出でて

愁ひつつ空みさくれば美しき星さはに出でて慰さむごとし

、

世の中の甘さ辛さを嘗めて來し人の言葉は聽くべきものか

小石川永井山の白露荘に移りて　二首

歩むべき道は自由にして置きて白露荘のなかにこそすめ

幸に物足りなさの夢は見ず物足りなさの生をば送れど

下町に行きて

何と云ふ醜蜘蛛それがいつの間に網を張りしや醜蜘蛛それが

友に　二首

ともすれば昔のことは何にもあれ憎からず見えぬ我が戀もはた

われに給ぶ君がこのごろの手紙には詩が欠けてあ
りいぶかしきかも

病院にて

悲しげに悲しげにわれを見たりけり死に行く友が
頭もたげて

、

亡き友が聖書のなかに挿みたるくれなゐの紐見れ
ば悲しも

、

酒屋のかど行き過ぎし人がうなづきつつ寒さしの
ぎとまた戻りしか

旅にて　三首

此の街道寂しくなりぬ馬かたの追分節の聲絶えて
今は

森のなかゆ梟の鳴く聲聞こえ寂びし我が宿夜のふ
けゆけば

雪の日は樂しげに皆爐のそばに無意味なること話
し合ひつつ

猫の歌

猩々緋の長椅子のうへに雪よりも白き牝猫が喉鳴
らしをり

、

ふる郷へまたとかへらぬ旅立ちの友を送りて泣き
濡れにつつ

、

始めからすべてのことを新しく一と夜眠りて改め
む我れ

大正十三年

、

この春はおくつきのなかに居るがごと花のたより
を聞かで暮らすも

、

街道を桃の花をばもちてゆく少女が頰も桃色ぞこ
れ

、

うつそみの世のことがらに異ならぬ夢見て迷ふ夢
とまことに

友に

美酒を歌うて花に哭きたまへ哀れの友よ何か迫る
時

棕櫚の歌

灼かれてぞ灰になりたる棕櫚の木が焦げ土のなか
ゆ青芽をふくも

、

畫に見たるアルレエキナの踊子の笑める面影が夢に見えつつ

金澤にて

豐かなる水に影をば投げてゐる金澤の町の夕べうつくし

、

ものごとのはかなさ人のたよりなさ憧がれ多き魂か泣くらむ

バラックの歌

子供らも花咲く枝と草を採りて綠のバラック建て

て遊ぶも

白鷺莊雜詠 二首

われも永く死せるがごとし腰かけ居るこの石のやうに死せるがごとし

家は靄のなかに溺れぬ霖雨にばらの籬も隱れがちにして

、

たらちねがその子の墓をいろいろの花もて埋づめ乳そそぎをり

旅にて

泉から流れる水に濡れ濡れし紅き苺を喰ふがうれ

しさ

八丈嶋にて　三首

安房の山のうへより昔眺めたる八丈ヶ嶋の土をけふ踏む

見れど船の影かくろひてはろばろと眼路の限りは海と雲のみ

しかすがに嶋に過こせば東京が戀しくなりぬ燈(ひ)とぼしごろの

旅にて　二首

くづれかかる廢屋の庭の草繁み名もなき爬蟲ここだ群がり

牛飼ひも牛も眞夏は晝ひなか草原の草のなかに寢てをり

、

な荒だてそ言葉柔らかにこころども穏かに人と話しはすべし

、

バラックは赤き陽の下に篠懸(すゝかけ)は白き埃りのなかに立ちつつ

、

煩惱の子の赤蟻がさくらの樹の血を吸ひ肉をむさぶり喰ふも

館山にて　六首

この頃は朝五時に起きて磯のべを散歩するまでに
病ひ癒えしも
船乗りは沖の鷗の啼く聲を聞くが嬉しさに止めら
れじとぞ
青き葉のなかより夏の象徴と云ばむばかりに柘榴
燃えつつ
清々し海氣をわれは麥酒より葡萄酒よりも好むこ
の頃
海と空とつづくあたりにここだくの星が輝く浪に
濡れつつ

嶋少女の長き黒髪なびかせて吹くこの風よ匂ひゆ
かしも

旅にて　二首

この日でりに畑が燒けて困りますと翁訴へけりわ
れらにさへも
噴き出づる泉に口をさし入れて水飲む牛の涼しげ
に見ゆ

歌麿の浮世繪を見て　二首

歌麿がかける限りの浮世繪は風情艶めく女ばかり
かも
女といふ女はも皆歌麿が目に認められつ手に描か

れつ

、

荒川の岸の草舟の草のなかに桔梗の花もまじりけるかな

涙の歌

人の流がす涙をば見て樂しめる人もありけりあはれその人

、

萩が花石の塀越しにひと枝ふた枝えだ垂れながら咲くが愛しさ

畫に

山姥がいだく緑兒金太郎の顏にふりかかる烏羽玉の髪

、

少女子が子供らしさと愛くしさこのままにして九十九までもこそ

、

よみがへるここちしにけりすがすがしくこの晴れわたる秋の朝には

江戸川にて

むかしこの岸に遊びつ蓼の花見つつ秋の詩口吟みつつ

途上にて

秋の暮れとぼりとぼりとぼろぼろが塵まぶれの道
ひとり歩りきつつ

月の歌

月はいつもわれらに謎を新しくかけをるがごとし
われらに謎を

雑詠　三首

お年よりは十歳はお若う見えますと女同志がおぐし賞で合へり
幽霊は現はるるかも弱き人病める人には現はるるかも

千萬の人の流れのあひだより神にも似たる人も出でとこそ

ルツソオの肖像に

をりをりは思ひ出だせりルツソオを少年の頃に慕ひしことを

蛾の歌　三首

電燈の火をとりに來てほやのそばをここだくの蛾が飛び廻るなり
ぐるぐると飛び廻る蛾は圏を狹め狹めてほやにつきあたりつつ
智恵のなき蛾は火に熱るほやにあたり屍をば皆そ

こにさらすも

大正十四年

、

雪の冬火の夏などを打ち越えて春はわれらに來て
微笑むも

三月大雪の日に

なかばふふむ馬醉木(あしび)の花は枝ながら雪に押されつ
地につくまでに

、

さくら花みなちりぢりにここに集ひ賞(め)でたる人も

みなちりぢりに

木蓮の花の歌

天國の路啓けりと木蓮の花が咲き咲きてそらの明
るさ

、

我が詩を讀む窓の敷居をかくすまでに白ばらの蔓
這ひ上りつつ

廢驛にて　二首

花散る頃古き宿驛(たてば)は居酒屋のこも冠りさへ見るが
寂しさ

灰色の石のまはりに這ひよりて寂しげに咲く白つ

つじかな

野ばらの歌　二首

けふもまた野茨折りに野ばら折りに野田のあたり
へひとりゆかなむ

野ばら、野ばら、薄紅ゐの花をもつ土手のなぞへ
の野ばら愛しも

畫に

南の畝に餉する老い人と春の日あしは歩み遲々た
り

、

君がゆく道も霧のなか我がかへる道も霧のなか利

根の川沿ひ

、

さみだれのしつこき雨が春蒔きの草花腐すしつこ
き雨が

、

山吹のいや繁々の葉のかげに玉蟲二匹燦めきてを
り

、

人々は戀と享樂と富と名のなかに呼吸して急き合
ひにつつ

靜寂めでて朝夕ごとに切支丹屋敷の跡をそぞろ歩りくも

切支丹屋敷跡こそゆかしけれ小草の花が黄と白ろに咲きて

ふりにし木の下闇に切支丹の殉教の人ら面影に見ゆ

館山にて　二首

よべのあらしに白き鷗が磯にここだ打ちあげられてかばねさらせり

我が欲しきは詩歌の本と住みごこちのよろしき室と美しき庭

旅にて

里人は涼みがてらに圓居して月の明りに繩なうてをり

讃に

いと寂しき雨の港に只一つ阿蘭陀の船か泊りてをるは

、

白き月の出づる頃よりいざ石の白鳥橋へ遊びにゆかな

、

俄か水が俄かに溢れ岸のべのすすき尾花はうつぶ

せになりつ

、

溪水を渡り來しかばか向つ峯にうたふ樵夫の聲の清けさ

友の言葉

一と畝ほどの庭耕やして鷄飼うてくらせば足ると友が言ひしも

友に　二首

涙流せ涙ながせばここだくの悲しきことも消えて失せなむ

身をな寄せそパンをな喰ひそ他人のパンは苦しと

ダンテも云ひつ

、

美しき夢ならば夢はいつまでもつづけ我が生はい寢て過ごさな

月の歌

いつもいつも美しくして新しきは月なりけりと見るごとに思ふ

畫に

白百合の花なす潔き少女子は神のいとし子拜みてよし

砂の海砂漠はひろしいづくにかいのちの泉君は認(と)
むらむ
バビロンの空に輝く星を見よはた豫言者が生(あ)れ出
づべしや
健かにあれと我がため言ひたまへヤコブの裔(すえ)に君
が若し遇はば
異國のふみここだ蒐めて送りませアラビヤの詩も
エジプトの歌も
駱駝の脊の革ぶくろにこそ入れて置け若しや砂漠
に星落ちたらば
燃ゆる陽に顔はま黑に燒かるとも燒かれたまふな

只魂ひは
砂の丘踏みてほろほろと碎く君がしりへに砂の雲
か立つらむ
紅海を渡らば見なむふりさけてアジアのそらにま
ばたく星を

雀の歌　二首

陽の射さぬ寒き地べたに雀らが身震ひしつつ餌(え)を
あさりをり
陽のあたる大屋根にあがり樋(と)ひに入り樋ひを出で
つつ雀らが遊ぶ

雪ふりしく寒き日に來て雪どけのぬかりみ踏みて
往にし君はも

老子經を讀みて

雪のごと白き頭が只一つ虚無のあひだに漂ふぞこ
れ

、

凍る夜に夜廻りが打つ拍子木の音寒うしてやがて
悲しも

、

葬式の棺につづきて限りなく荷馬車などがゆく埃
り立てつつ

大正十五年

、

黎明の微笑むがなかに消殘りの星の一つが燦めき
につつ

浮間ヶ原に遊べる時

愛くしき手にて摘みたる櫻草うらなくな投げそ川
の流れに

白鷺莊雜詠 三首

廢莊の大ざくらの木の切株に枝生えて花の咲くが
憐れさ

我が室へさくらの花がしぶきしてまだらにぞ敷く
隅々までに
我が門に道三筋あり野にゆく道市にゆく道墓にゆ
く道

、

花は散りて又咲くからに面白し人は然らじ涙虹の
ごとし

、

新橋の若き舞妓は初咲きの紅ばらの匂ひゆかしく
もあるか

、

酒屋には近からずとも君がやうに桃の林のなかに
住ましまし

、

見せまく欲り君に名ぐはしき印南野と加古の沙濱
の春の景色は

、

椿咲く小藪のなかに幟立てて祭り太鼓を叩く子供
ら

、

またしても呼びかけられつはるか我がうしろより
我が青春の聲に

畫に

花ざかりの柘榴の下の草のうへに白き孔雀が尾羽
ひろげつつ

、

思ひ出は破れ甕より零れ出づる酒のしたたりなつ
かしきかも

涙の歌

眼にしのみ浮ぶ涙がほろほろとかたる聲にも浮び
けるかな

大津在にて

藪かげの噴き出での井戸のかたはらに石の地藏が

笑みつつ立つも

琵琶湖畔にて　四首

そのやうに切れぎれにな啼きそほととぎす聽くわ
れ苦し切れぎれの聲は
ささなみの湖のほとりにほととぎすひとりし聽け
ば寂しかりけり
子供らしくほととぎす見て拜みし杜子美しのびぬ
面白ければ
ほととぎす鳴きて飛びける湖の空よ虹のかけはし
懸りたりけり

、

人知れず埋づめられしか君は暗き大海原の名のなき墓に

、

青銅の蛇形の樋ひが雨水を腹いつぱいに飲み通しつつ

友に

哭かざらめ君が最愛兒はきのふまで蝶や花やになぞへられしに

下總にて　二首

夏の夜の湖漕ぎ行けばさらさらと葦の葉鳴りて星の飛ぶ見ゆ

歌に似たるふしの聞こえれば水夫は云ふあれは酒々井の漁師が歌と

白鷺莊雜詠　四首

白き蝶が春夏かけてひらひらと飛び舞ふを君も奇しと見るかや

悲しげに微笑むもあり樂しげに微笑むもあり人の生ぞこれ

病みてわれ久しき間熱と夢のなかに喘ぎつ此の世歌ひつつ

をりをりは我れと悲しびを呼び起しその悲しびを樂しびて見るも

夜くだちに友越ゆらむか星の歩りく信濃の山を友
越ゆらむか

旅にて　三首

雨にならむ筑波の山があのやうにいつもより近く
見えて來しかば
嶺に登り嶺のうへから我れ見たり養蠶の國と利根
の行く水
ここゆ見れば紫色に夕づきぬ筑波、かけ越、眞壁
の宿は

文化村にて　二首

聲悲しく地に這ふごとく此の村にミニョンの唄歌
ふ子や誰れ
このごとき美しき夜はいつか讀みし美しき詩を思
はざらめや

思ひ出づるままに歌ふが民の謠うまかれまづかれ
眞率溢れつつ

机の上の一輪ざしの白き花は容艶けり何むの花ぞ
も

夏の雨はいま開かうとする花のやうにさはやかに
はた膨らみて降り

、

夏の花と若き處女を見て思へらく世の美しきもの
の限りと

旅にて

窓ひらけば蜜柑畑よりこがねいろにひかる香ひが
流れて入るも

月の歌

雲といふヴェールをのけて月はその美しき面を漸
々見せつ

、

戸を叩く風の音さへ恐ろしや魔女の話を夜ふけて
聽けば

、

なにとなく身のゆるみ覺ゆしばらくは遊びくらさ
む幼兒のやうに

、

雪の朝淡紅色の優鳩がコッコッと塔の扉を叩きを
り

、

闇のなかを見つむればそこに一と筋のとこしへの

道が浮び出でつつ

（下卷　終）

正誤――上卷六七頁二行、三首は二首。下卷一八〇頁末行、漂ふらむかは漂はむかも。仝二〇〇頁六行、君が家は友が家。仝二一二頁、秦淮夜泊の圖にの歌四、五の句、歌ふは誰ぞとたづねまく欲りは、歌ふは悲しとどめまく欲りと訂正す。上卷八頁六行、二百首は一百餘首。仝一七頁八行、五十首は十九首の誤り。

19254

昭和三年十一月十五日印刷
昭和三年十一月二十一日發行

定價金貳圓

歌集　野の花

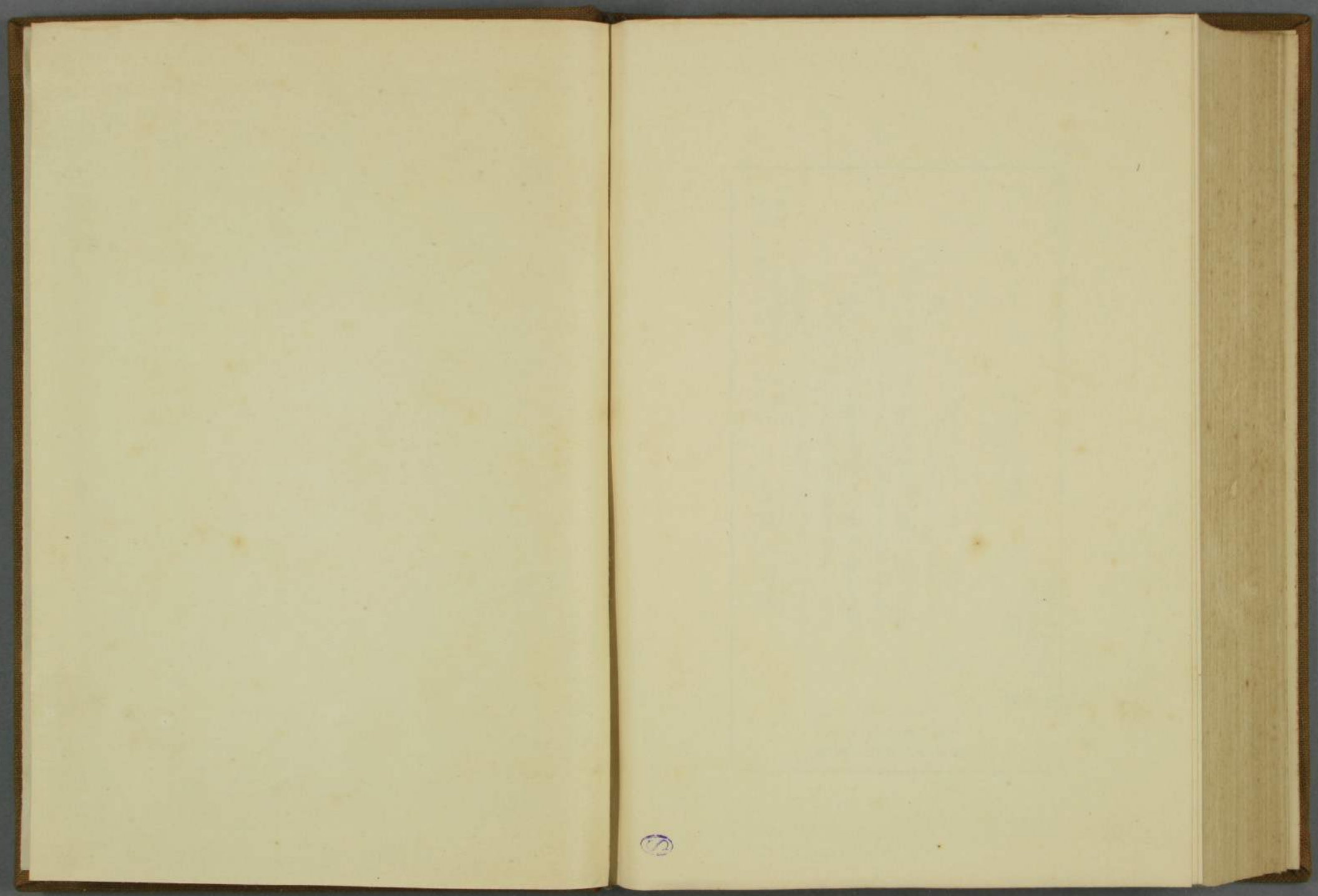
著作者　東京市小石川區久堅町七十八番地　前田儀作

發行者　東京市小石川區江戸川町十八番地　飯尾謙藏

印刷者　東京市小石川區大塚窪町一番地　山田一郎

東京市小石川區大塚窪町一番地
印刷　北山堂印刷所

發行所　東京市小石川區江戸川町十八番地　交蘭社
電話小石川三一五一番
振替東京四〇二七九番



神戸市港区湊町
廣文堂書店
電話三〇六九番